第Ⅱ章　発掘調査

Ⅱ－1　9901調査地点

1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本荘北地区に所在する本庄遺跡は，熊本市遺跡地図No. 8－95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である．

阿蘇に発する白川は，中流域で河岸段丘を発達させながら熊本大学黒髪地区付近で蛇行したあと穏かな流れとなって下流へ下る．本遺跡はその中流から下流へさしかかる地点であり，白川左岸に形成された自然堤防上（標高14 m）に位置している．

本荘北地区において昨年実施された中央診療棟建設に伴う発掘調査（9807）では，7世紀後半から9世紀初頭にかけての竪穴住居址や掘立柱建物が検出された（熊本大学埋蔵文化財調査室年報5）．また1996年に行われた医学部校舎建設工事に伴う発掘調査（9601）では8世紀～9世紀の古代の集落址が調査された．その際「田井」「杉本寺」などのヘラ書きや墨書をもつ土器が大量に出土した．また古墳時代前期の住居址が，付近一帯としては初めて確認され，古墳時代から古代にかけての複合的な遺跡の広がりを示している（熊本大学埋蔵文化財調査室年報3）．これらの出土遺物と類似した「田井」のヘラ書き土器が出土している大江遺跡群や新屋敷遺跡といった奈良・平安時代の集落址が，本遺跡の上流に控えている．

2. 調査の概要

平成10年の年度当初計画にあげられていた事業である．8月中旬に施設部より発掘調査の依頼があった．調査期間を積算したところ半年以上かかることになり，調査員二人で調査に当たることとした．諸手続き・準備を終えた後年内に調査を開始すると，調査期間中に1･2月の年報作成期間にかかり調査を一時中断せねばならないため3月から調査に入ることになった．

ところが，年度末に補正予算によって年報作成期間にもかかわらず理学部自然科学等総合実験棟の新営工事に係る発掘調査を優先して行わねばならず，3月からの本事業の調査には二人体制では臨めない状況となった．このため施設部と協議を重ね，12月～1月の間に調査予定地内の支障配管切替工事を先行して行い（熊本大学埋蔵文化財調査室年報5），理学部の調査の終了を待って4月から本調査に入ることになった．

本調査は4月5日より開始した．廃土処理等の都合から調査区をⅠ区（東側）とⅡ区（西側）に2分割し，Ⅰ区から調査を行った．6月21日にⅠ区の調査を終了し，廃土を移動させ7月5日からⅡ区の調査を開始した．8月30日に現場説明会を開き，9月2日をもって全ての作業を終了した．

〈調査面積〉

2405㎡

〈調査期間〉

1999年　4月5日～9月2日

〈調査員・参加者〉

小畑弘己，大坪志子．

上野しず香，岡崎光子，岡田イツ代，岡村久美子，押方富江，甲斐田末男，勝野義勝，熊本茂仁，黒木重信，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，坂口三輝子，白石亜紀，白石美智子，鈴木笙子，高松北子，溜渕俊子，土田ちえみ，中川毅人，橋口剛士，林田恵子，番山明子，福田久美子，古野京子，堀川貞子，松井昭子，宮村邦子，宮本里美，宮本千恵子，村上浩明，森川征子，森川護，森田ミドリ，吉田ひろこ．また，徐鐘旻氏（熊本大学文学部）の協力を得た．

3. 調査の結果

a　基本層序

調査区は周囲全てが包含層や遺構面まで撹乱を受けており，周辺での調査において参考となるような良好な層序の確認は出来ていない．かろうじて，調査区の東壁で

写真1　Ⅰ区全景（北東より）

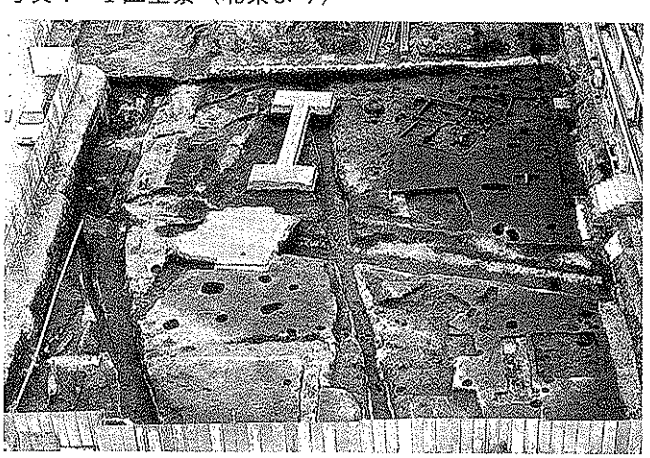
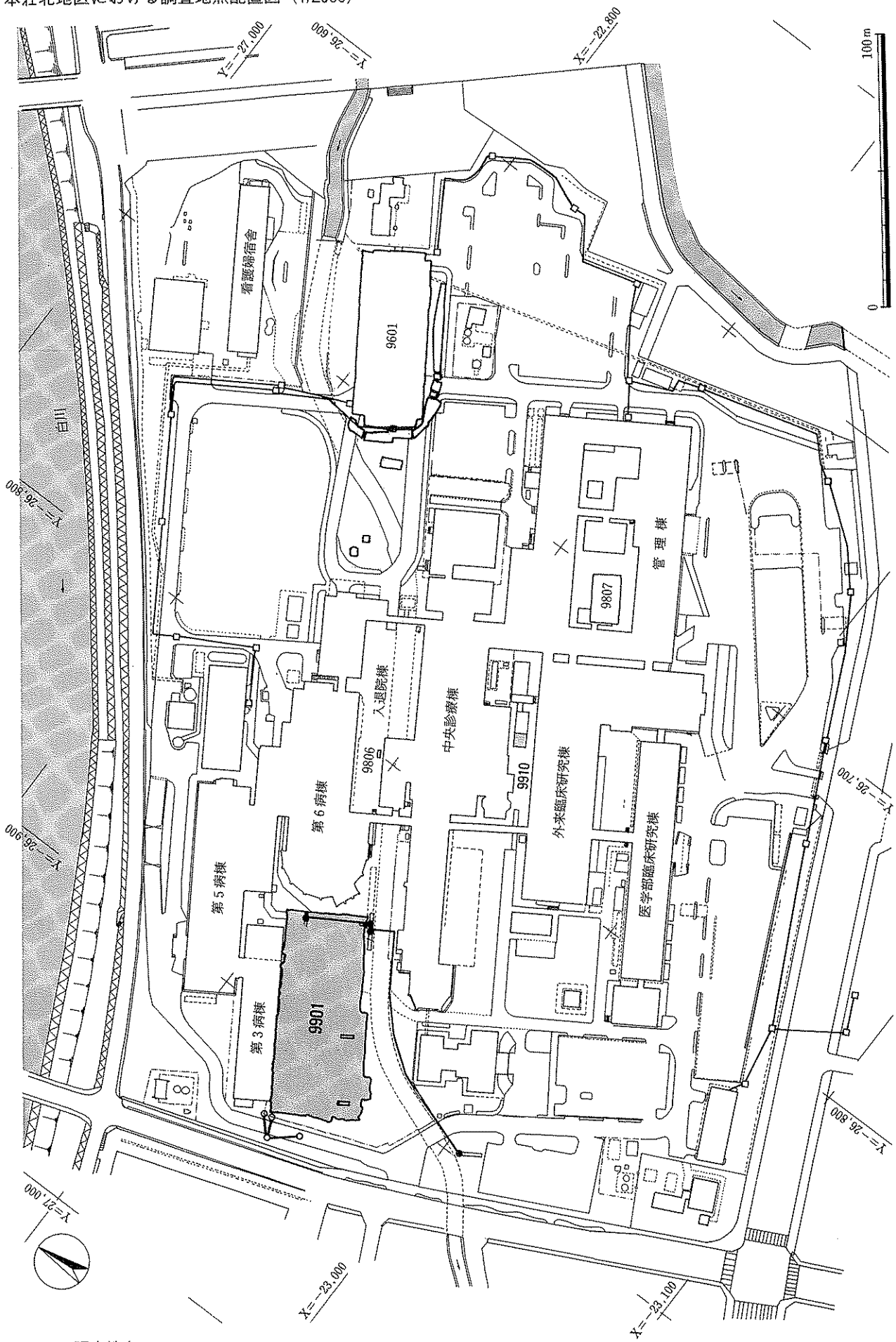


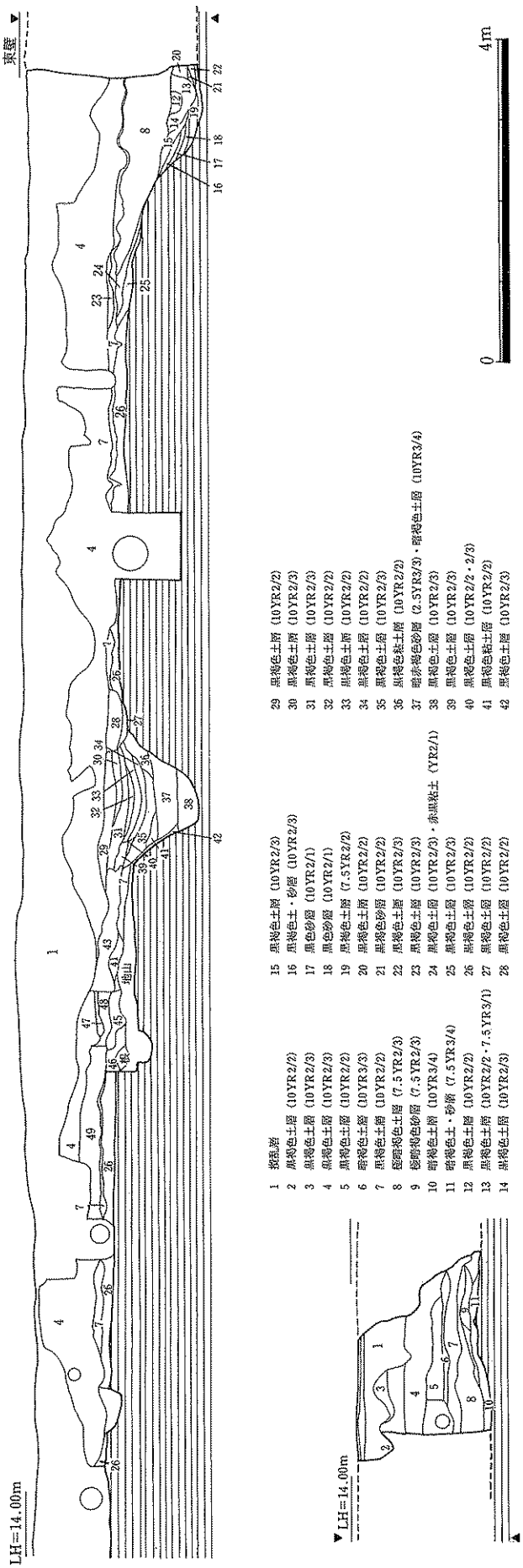
図２　本荘北地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅱ－１　９９０１調査地点

図 3　9901 調査地点遺構配置実測図（1/400）

図４　調査区壁土層断面実測図（1/80）



Ⅱ－１　９９０１調査地点

遺物包含層と遺構面のある程度の深さなどがおさえられた．1～4・23層までは近・現代埋土で深さ1.4m辺りまで堆積している．5層―黒褐色土層（10YR2/2，厚さ25cm）と6層―暗褐色土層（10YR3/3，厚さ15cm）は近世・近代の耕作土である．7層―黒褐色土層（10YR2/2，厚さ4～30cm）が古代の遺物包含層である．5・6層が確認できた南側の一部で最も遺存がよかったが，その他の箇所では削平されていた．7層下の26層は古墳時代の遺構の覆土である．これまでは遺構検出面（地山）としている暗褐色土の直上に古代の遺物包含層が堆積していたが本調査区では古代の遺物包含層下に古墳時代の遺構の覆土があり，古墳時代の遺構の広がりに伴い場所によっては古墳時代の遺構覆土・遺物包含層がある可能性を示している．

b　検出遺構と遺物（図3）

今回の調査で検出した主な遺構は，古墳時代前期の竪穴住居址9基と土壙3基，8世紀後半の竪穴住居址9基，9世紀前半の竪穴住居址3基，掘立柱建物址6棟，溝が大小合わせて18条である．

〈溝〉

1・380・358号溝

3条とも並行に調査区を北東―南西方向に貫く．1号溝は幅最大2m，深さは最も深いところで1.2mである．Ⅱ区では幅を1m前後にたもって南西から北東に向かって流れている．380号溝は幅2.6m前後，深さ0.2mである．2号溝に切られている辺りでゆるく湾曲しているが，両者はこの辺りで重なるものと思われる．358号は幅1.5m前後，深さ0.4mである．3条とも，水の作用によるマンガン沈殿物と思われる鉱物で被覆されていた．設営時の溝の形状をとどめていると思われる．2号溝より東の部分で特にマンガン沈殿物の被覆が複雑に重複していたため流路の決定に困難をきたした．この部分では1号溝内に数度の掘直しがあったことが確認されており，西から伸びてくる1号溝はこれらのうちの1条につながり，2号溝より東で1号溝としている溝が380号溝に対応するのではないかと考えられる．3条の溝の設営時期は近いものであろうが，1号溝と380号溝については遺物の整理・精査を待って検討したい．

写真2　Ⅱ区・溝（北西より）

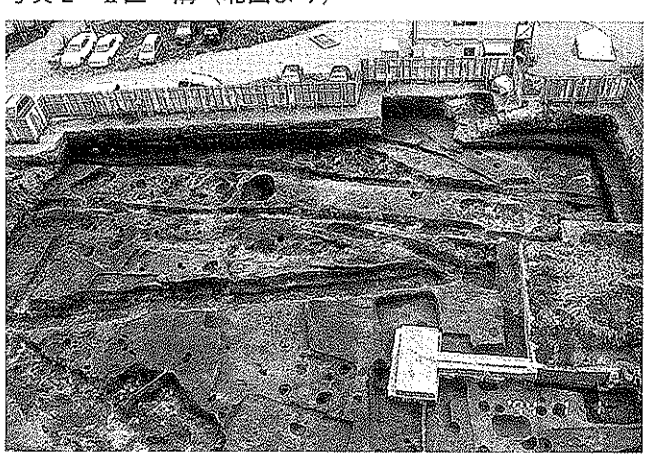
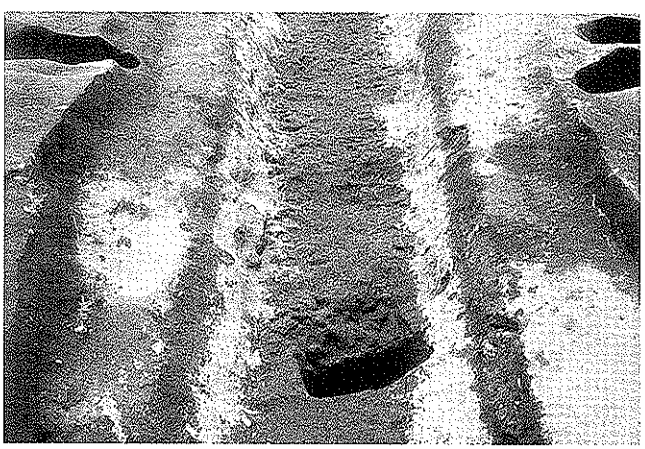


写真3　379・380・385号溝（南西より）

2号溝

調査区を北北西―南南東に走っている．幅約5m，深さ約1.1mで，溝の中で最も大きな溝である．北に向かって流れている．時期は最も新しく近代以降のものである．

写真4　2号溝（北西より）



4号溝

調査区を北東―南西に貫く．1・380号溝より若干北に振れている．幅約2.2m，深さ1.1m前後で一直線に掘削され北東から南西に流れている．古墳時代前期の住居址を切っているが，5世紀には既に設営・利用されていたと思われる．上面で土師器甕と須恵器甕等を並べるか重ねて故意に破損してあった．祭事を行った跡と思われる．8世紀前半には埋没していたと考えられる．

図5　各遺構土層断面実測図（1/20・1/40）

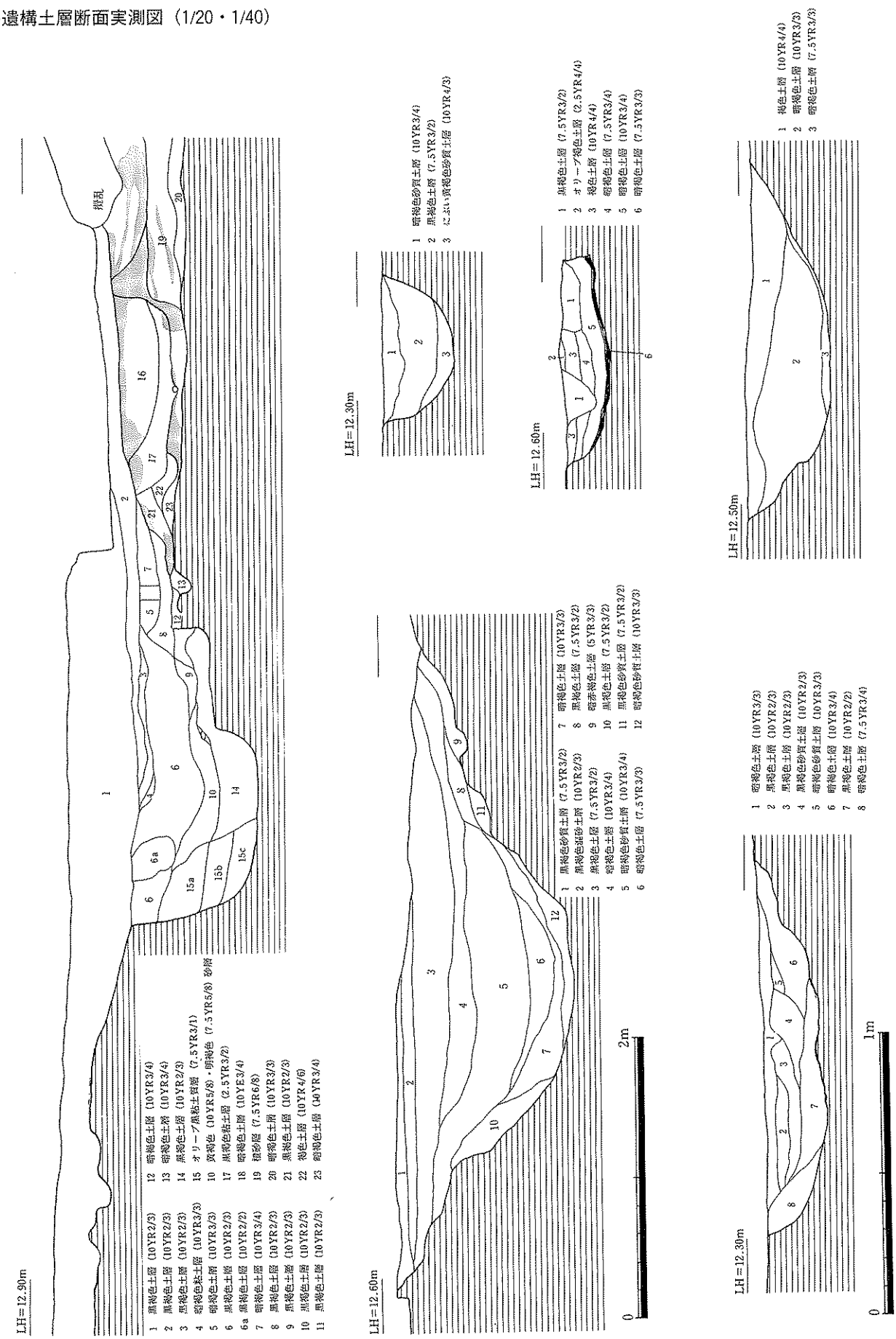


写真5　4号溝（北東より）

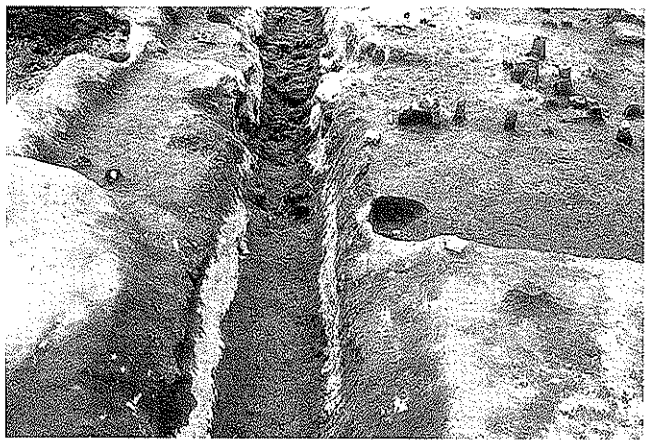
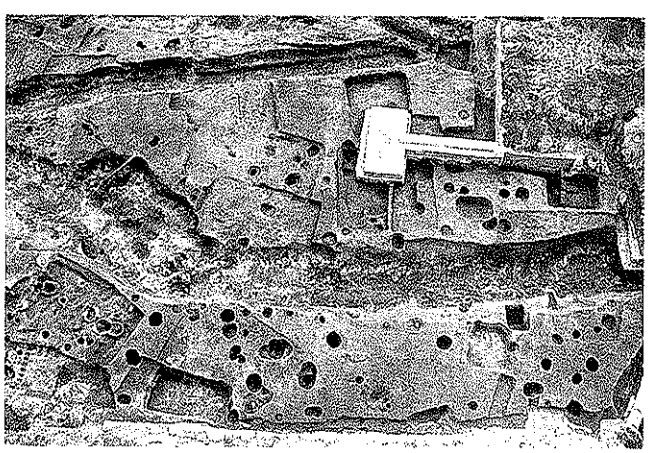


写真6　4号溝上部・遺物出土状況（北東より）

57・72号溝

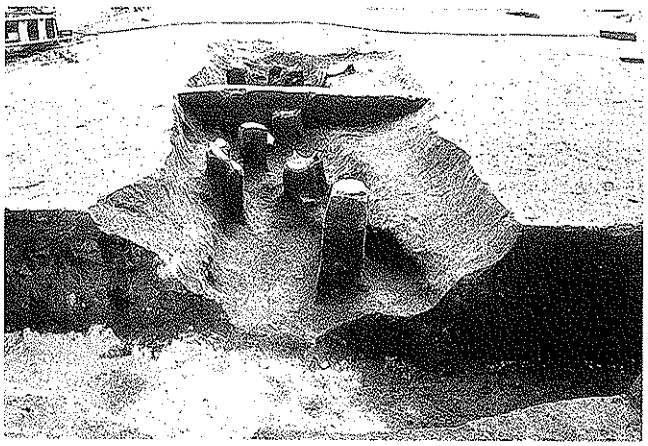
72号溝は調査区を湾曲しながら東西に走っており，57号は72号溝がある程度埋没した段階で新たに掘りこまれている．72号はⅡ区では幅約3.4m前後で安定しているが，調査区の中央より東では撹乱やその他の溝との重複などにより形状が一定しない．川底はマンガンと砂の互層となっていた．遺物より6世紀中頃には設営・利用され，8世紀後半までには埋没したと思われる．

写真7　72号溝（北西より）



57号溝は幅約1m，深さ0.1mで72号溝に沿って流れているが，終始が不明確である．遺物より8世紀中頃から利用され短期間のうちに埋没したと思われる．

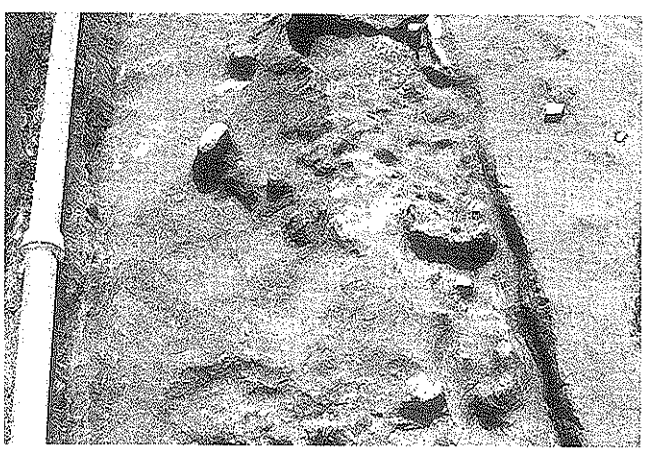
写真8　57号溝遺物出土状況（北東より）



15・16・74・373号溝

それぞれ幅が約1m，深さが20cm程度の細く浅い溝である．15号・16号溝は周辺と同じくマンガンの沈着があるが形状は不明確である．砂とマンガン層が互層となって堆積していた．74・373号溝はマンガンの沈着を受けていない．いずれも遺物が少ないため時期判定は難しい．

写真9　15・16号溝（北東より）



58号溝

調査区中央を北に向かって流れている．幅0.8m，深さ0.15mの小さな溝である．方位から8世紀後半以降，条里にならって設営されたものと思われる．

1号・380号溝の周辺ではマンガンの沈着が著しかった．それぞれの溝がいわばマンガンによりコーティングされた状態であった．またマンガンの層は数枚あり，4号溝を境として南側に大地が傾斜する辺りまで及んでおり，溝の掘削を繰り返すとともに溝が埋没した後も低地で長期間水の作用を受けていたと思われる．

〈竪穴住居址〉

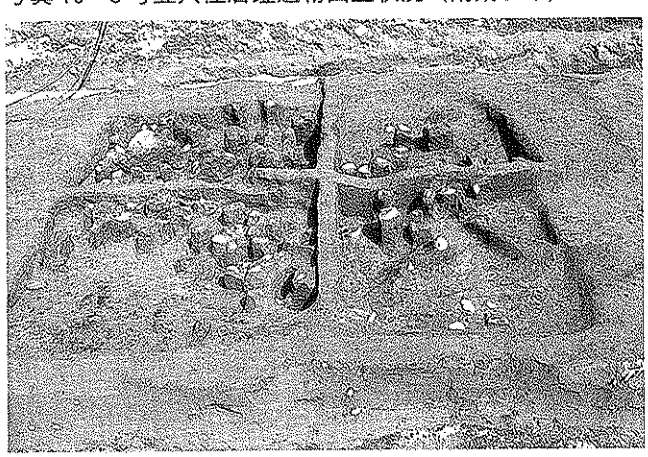
古墳時代の竪穴住居址

3号竪穴住居址（図6）

Ⅰ区の調査区北壁近くで検出された．縦2.9ｍ，幅3.6ｍで，軸は南北方向に対しちょうど45°東西に振れている．検出時の深さは約30cmである．調査区の中でも高い位置にあるため，上面はかなり削平されている．中央部で硬化した床面が確認できた．また，東南側の壁近くに炉穴と思われる穴が確認された．柱穴は検出されなかった．

この住居址からは，良好な状態で遺物が多量に出土した（図7）．焼土や木炭，砂岩が床面に散在していた．出土した土師器の器種には高坏・小型丸底壷・壷・甕がある．これらは布留1式～布留2式，4世紀前半に比定できよう．

写真10　3号竪穴住居址遺物出土状況（南東より）



5号竪穴住居址（図6）

Ⅰ区の東壁側で検出した．東側一部が調査区外に延びる．軸は3号住居址と同一方向である．住居址の南東半分が4号溝によって削られている．現状では縦約3.2ｍ，幅4.2ｍである．隣接する80号竪穴住居址の様子から，4号溝の対岸あたりに南壁があったと考えられる．検出時の深さは20cmである．

写真11　5号竪穴住居址遺物出土状況（南西より）

本住居址からも良好な状態の土師器が多量に出土したほか，木炭などが床面に散在していた．住居址の中央では硬化した床面が確認されたが，柱穴は検出されなかった．出土した土師器の器種には高坏・小型丸底壷・壷・鉢・器台・甕がある．これらは3号住居址の出土土器と同じく布留1式～布留2式に比定される．また，手捏の高坏のミニチュアも出土している（図8－20）．

80号竪穴住居址（図9）

5号竪穴住居址の西側に隣接し，5号住居址の西壁を一部切るかたちで検出された．80号竪穴住居址も南西側半分を4号溝により削られているが，対岸に南壁が遺存しており全体のプランは確認可能である．4号溝より北側の部分を検出した当初は，2基の竪穴住居の重複と考えて掘り下げを行ったが，溝の対岸の様子から1基の住居であると判断した．8世紀と9世紀の竪穴住居址が重複している．軸の向きは3･5号住居址と同一方向である．縦5.6ｍ，幅7.4ｍである．中央部分で硬化した床面が確認されたが，柱穴は検出されなかった．遺物より布留2式の頃と思われる．

写真12　80号竪穴住居址遺物出土状況（北西より）

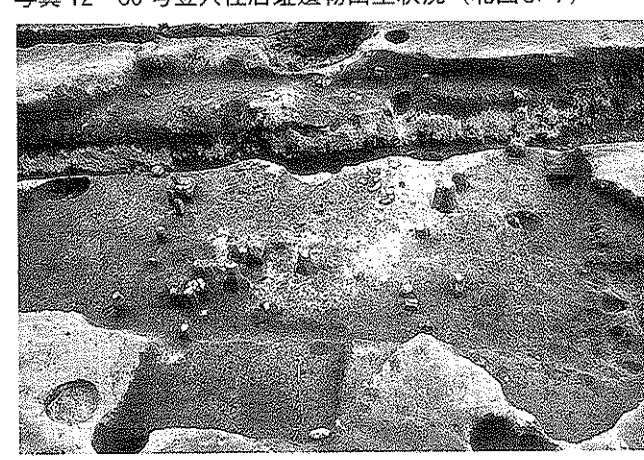


写真13　80号竪穴住居址（南東より）

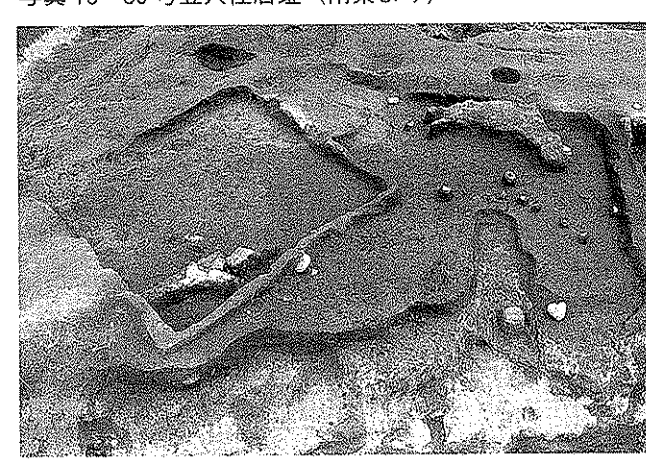


図６　３・５号竪穴住居址実測図（1/50）

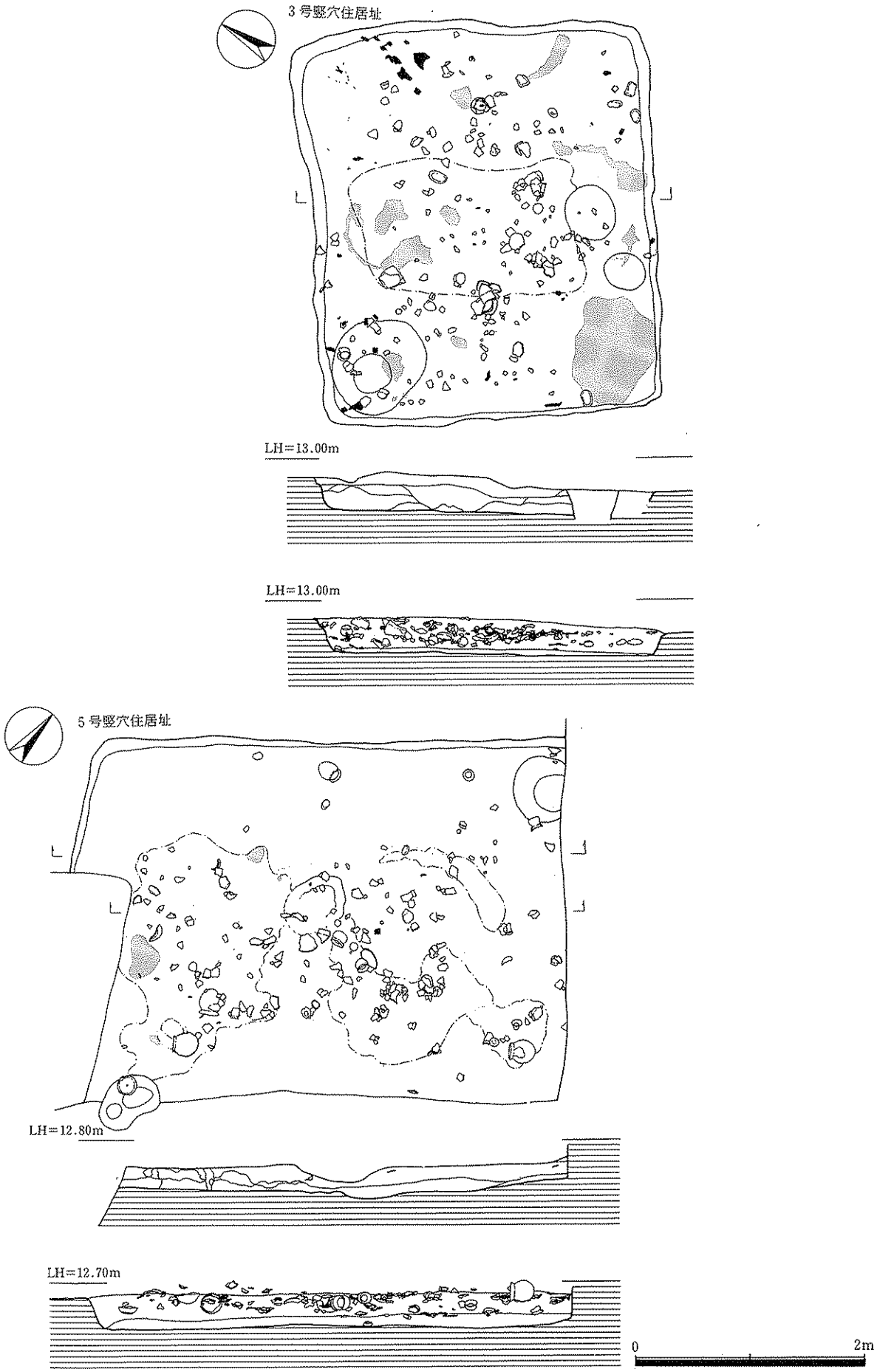


図７　３号竪穴住居址出土遺物実測図（1/4）

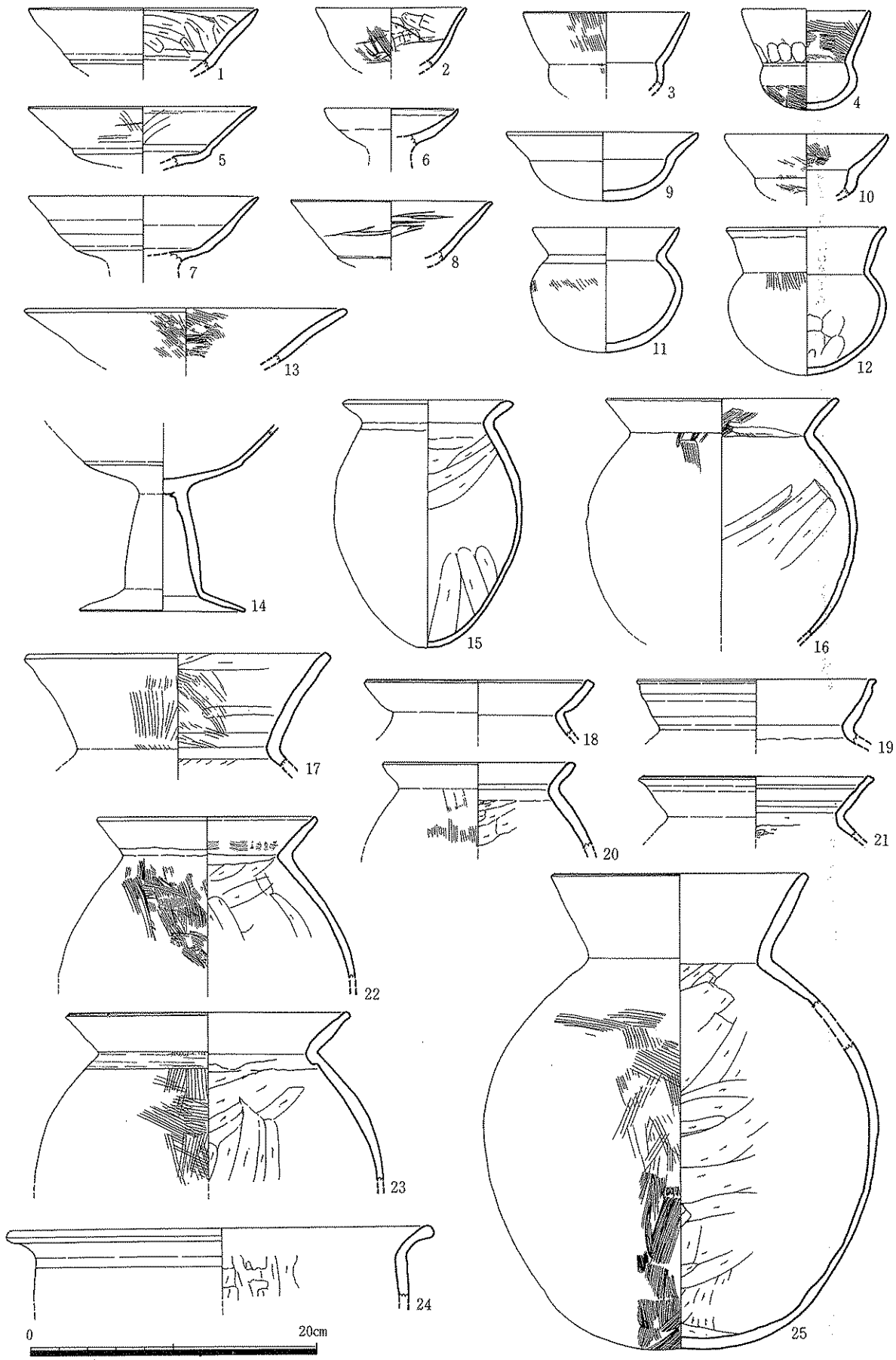


図８　５号竪穴住居址出土遺物実測図（1/2・1/4）

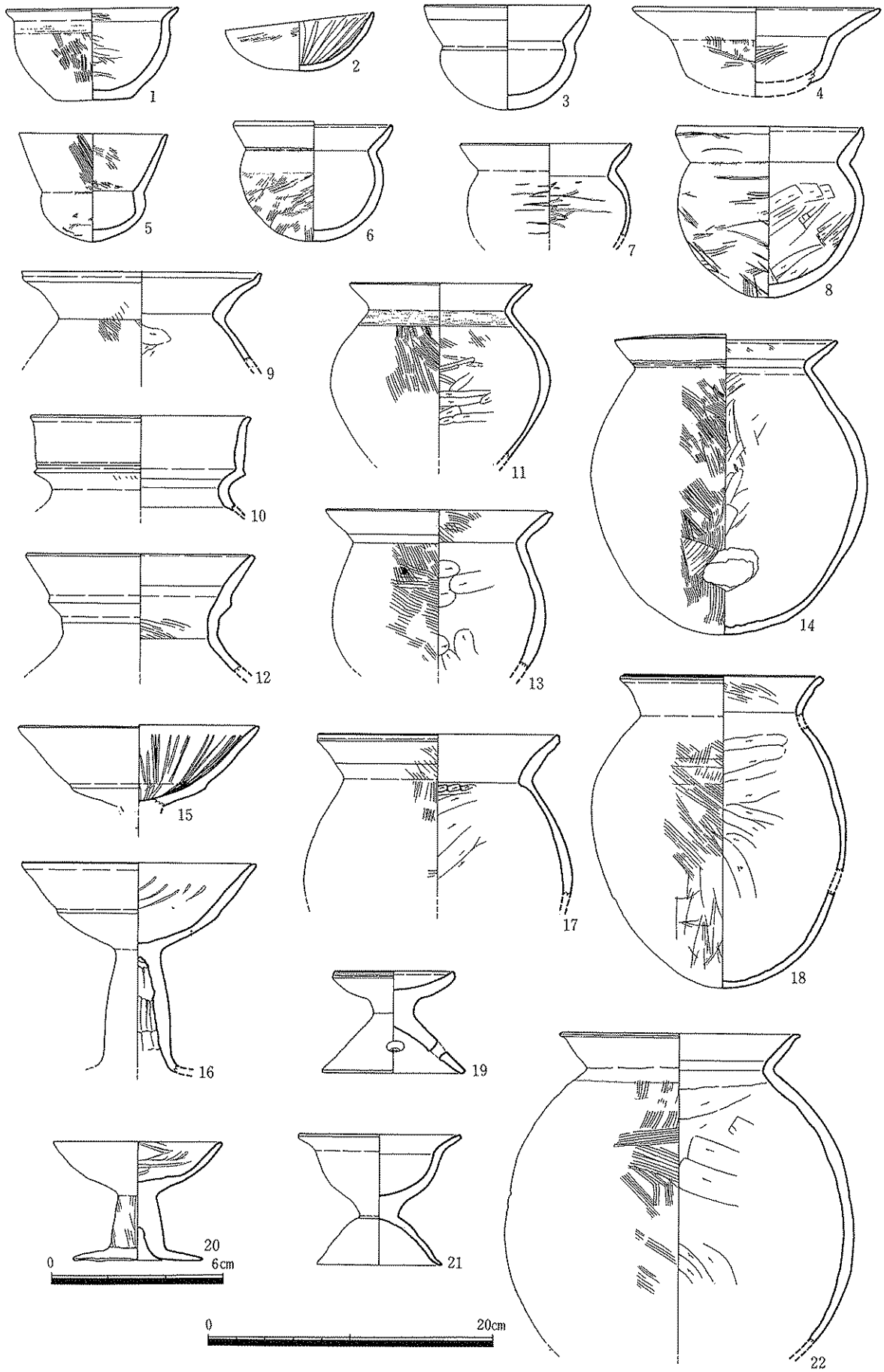
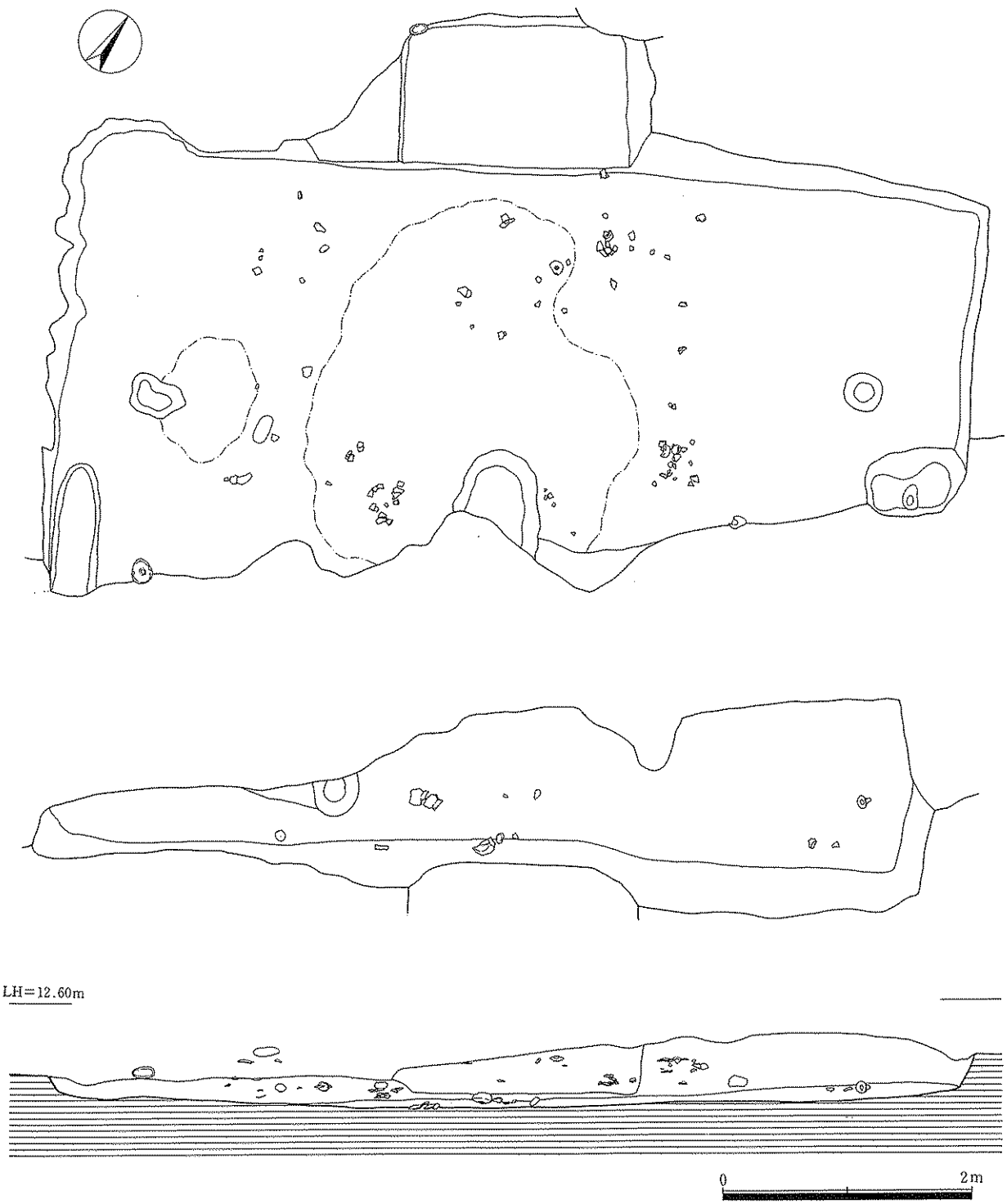


図9　80号竪穴住居址実測図（1/50）



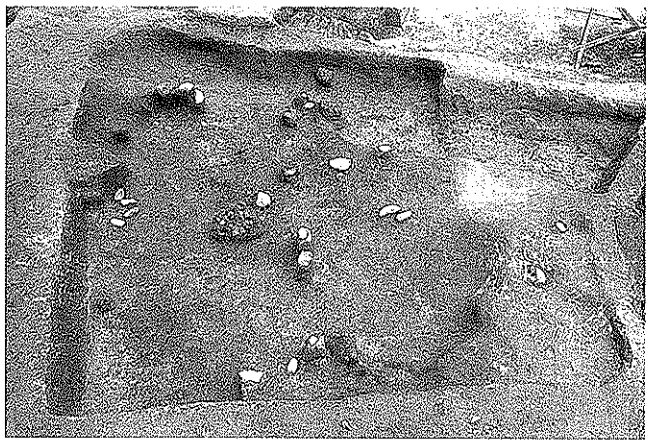
35号竪穴住居址

2号溝の東側で検出した．軸の方向は3号住居址より少し西に振れている．縦5m，幅約5.9mである．後に37号溝が掘りこまれマンガン層の沈着などがある．硬化面や柱穴などは検出されなかった．床面には土器片や円礫，焼土が散在していた．特に，円礫が多かったのが注目される．軸の方向より3・5号竪穴住居址と同じく4世紀と思われる．

113号竪穴住居址

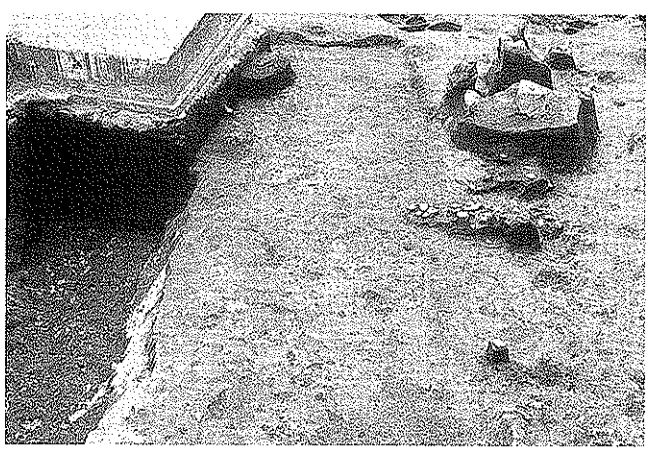
調査区の中央部で検出された．住居址の中央部を4号溝が貫き，また近・現代の建物基礎により南半を破壊されている．35号竪穴住居址や52号竪穴住居址がある大

写真14　35号竪穴住居址（南西より）



地は4号溝に向かって傾斜しており本住居址付近は浅い溝状になっていた．軸は北西より若干西に振れ，4号溝とは直交している．現状で縦5.3m，幅7.4mである．深さは5cm前後でかろうじてプランを確認した．硬化面を一部確認したほかは，明確な柱穴は確認されず，遺物も少ない．

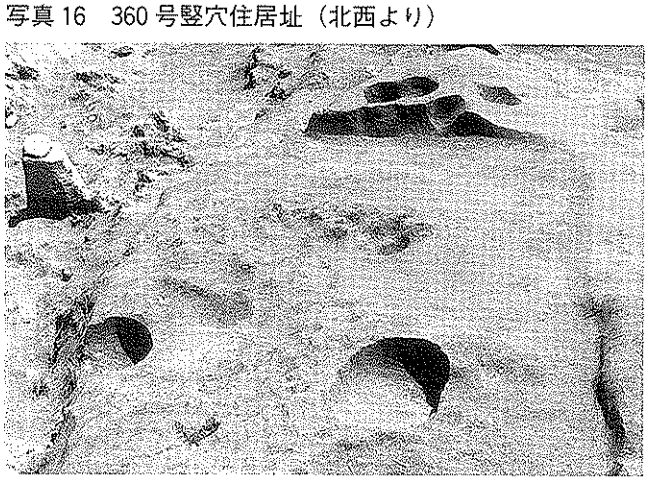
写真15　113号竪穴住居址（北東より）



360号竪穴住居址

Ⅱ区の中央やや北の位置で検出した．北半を72号溝に切られて消失している．また258号竪穴住居址が切っている．現状では縦3.2m，幅5.7m，深さは30cmである．軸は南北より若干西に振れる．住居址中央で硬化面と炉穴と思われるピットを確認した．柱穴は検出されなかった．他の古墳時代前期の住居址と比較すると軸が南北に近い．また，壁に沿って周囲に細い溝を廻らせるなど相違点がある．500号掘立柱建物址に切られているため8世紀後半を下ることはない．

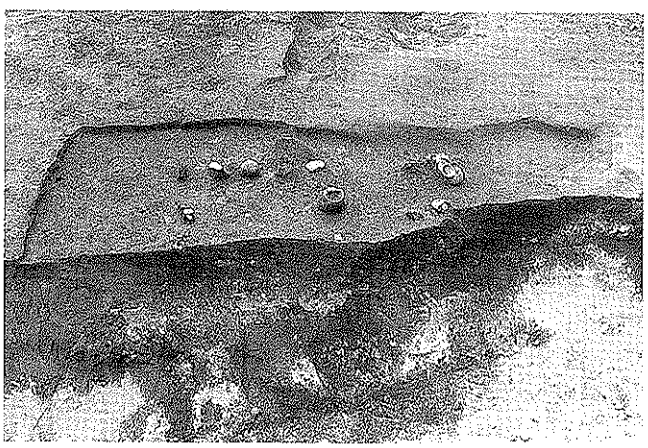
写真16　360号竪穴住居址（北西より）



387号住居址

調査区の中央付近で検出した．4号溝の掘り下げ時に断面から確認した．全体の1/4程度が残っている．現状で縦1.2m，幅4.3m，深さは10cmである．軸は3･5号竪穴住居址と同じである．硬化面は確認したが柱穴は検出されなかった．床面には数点の土器と木炭が散在していた．出土した土師器から布留1式～布留2式の頃と思われる．

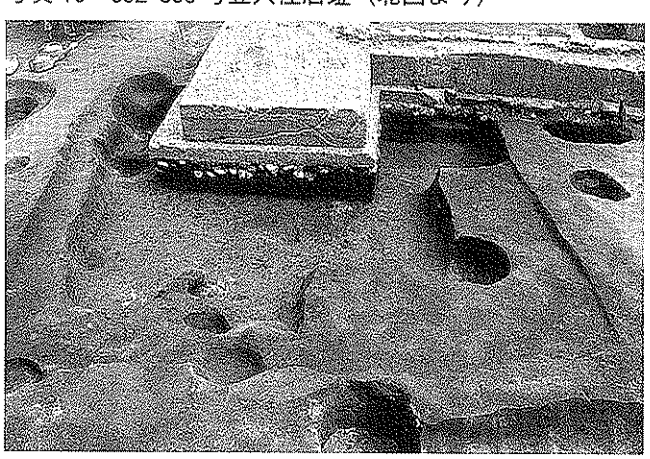
写真17　387号竪穴住居址（北西より）



352・353号竪穴住居址

Ⅱ区の中央やや西側で検出した．一部を近現代の建物基礎で破壊されている．353号が352号住居址の中央に入れ子状に掘りこまれている．352号住居址は縦4.3m，幅4.6m，深さ5cm，353号住居址は縦2.6m，幅3.6m，深さ30cmである．353号住居址では硬化した床面

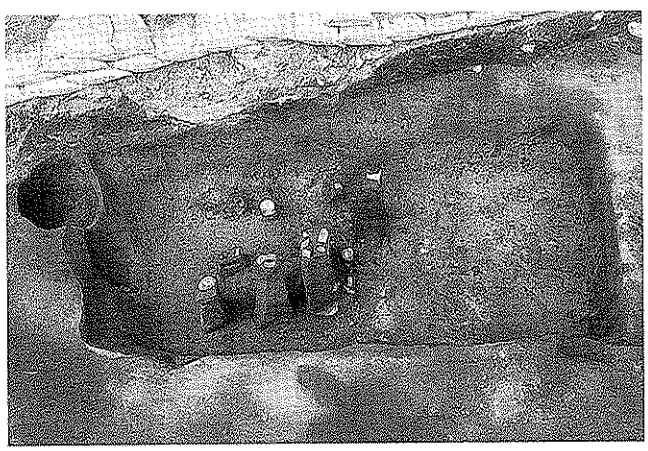
写真18　352･353号竪穴住居址（北西より）



が確認できたが，炉穴や柱穴は検出されなかった．遺物が少なく時期判定は難しいが，住居の軸方向は113号と同一で4世紀代であろう．

その他337号遺構および346号遺構も住居址である可能性ある．ただし346号遺構（3.6×2.1m）は遺物が多いものの深さが1.1mあり，ほかの住居址とは違っている． 363号遺構は2m四方程度の掘りこみである．土器の細片がわずかと礫が数個あったほかは，硬化した床面や柱穴も見られない．

写真19　346号竪穴遺物出土状況（南東より）



古代Ⅰ期の竪穴住居址

30号竪穴住居址

80号竪穴住居址の上に掘りこまれていた．当初80号竪穴住居址を別のプランで検討し80号住居址を先に掘り下げたため全体の正確なプランを把握できなかった．軸は東西を向いており，おそらく4m四方ほどのプランであったと考えている．北壁側でわずかに硬化した床面と竈の白色の粘土と焼土が確認された．

43号竪穴住居址

調査区中央の北側で検出した．配管工事により，住居址の北壁を削平されている．現状で縦2.7m，幅3.9m，深さは約20cmである．軸は南北より若干西に振れている．硬化した床面や柱穴は確認されなかった．

写真20　43･50号竪穴住居址（北東より）

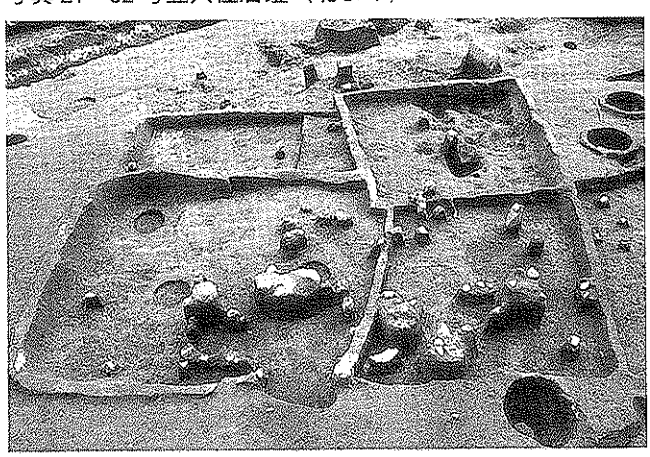
50号竪穴住居址

43号竪穴住居址の南に隣接して検出された．東半分は52号竪穴住居址に切られている．軸は南北より少し西に振れている．現状では縦3m，幅2m，深さは20cm程度である．硬化した床面や柱穴などは確認されなかった．住居に明確に伴う遺物が少なく時期決定は困難であるが，当該期の遺構のなかでは早い段階のものである．

52号竪穴住居址

検出当初は4基の竪穴住居址が切り合っているものとして掘り下げをおこなったが，遺物や散在する炭の状況から1基の竪穴住居であると判断した．軸はほぼ南北を向いており，縦6m，幅6.2m，深さ20cmである．硬化した床面が一部で確認できた．床面には炭が一面に散在していた．ただし，木炭などの建築部材を示すようなものは無く，焼失住居とは考えられない．遺物は土師器とともに須恵器がある．

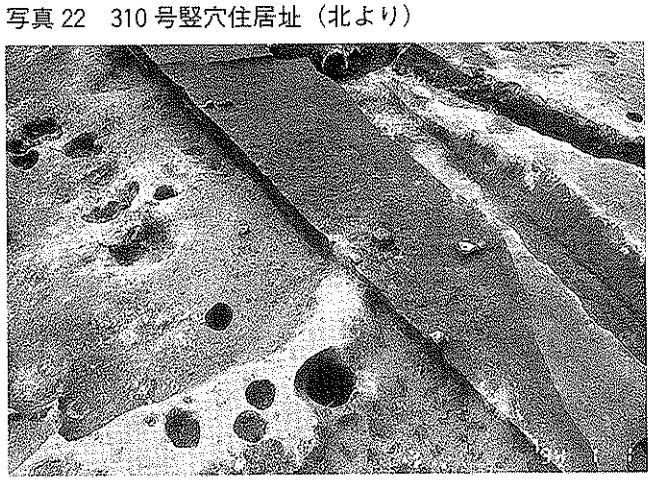
写真21　52号竪穴住居址（北より）



310号竪穴住居址

Ⅰ区調査時にはプランを把握することができなかったが，Ⅱ区にかかる部分を調査して住居址であることを確

写真22　310号竪穴住居址（北より）



認した．軸は南北を向いており約6m四方のプランであったと考えられる．住居址の中央部分で硬化した床面を確認した．柱穴は検出できなかった．

290・291号竪穴住居址

調査区中央の北端で検出した，既に北側の大半を削平されており，上面もかなり削られていた．どちらも軸は南北を向いている．硬化した床面や柱穴などは確認されなかった．遺物も少なく破片ばかりである．

写真23　290号竪穴住居址（南東より）

写真24　291号竪穴住居址（南東より）

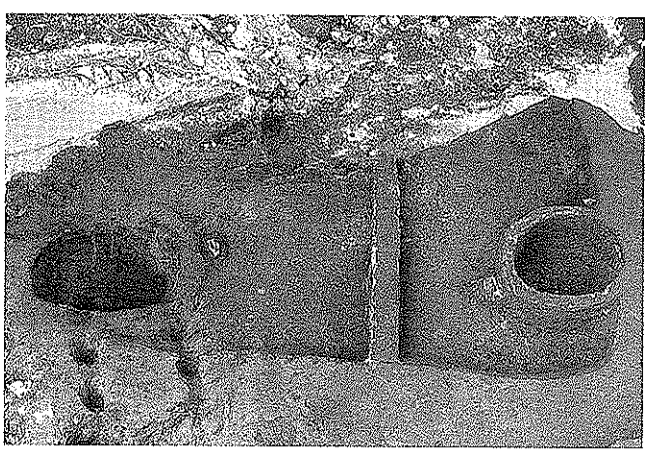
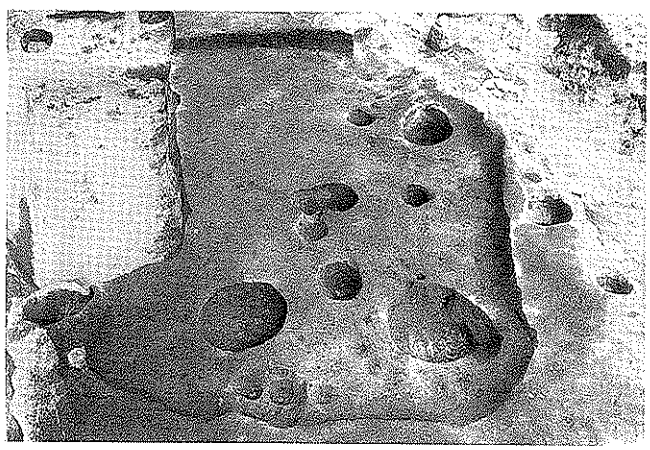


写真25　297号竪穴住居址（西より）

297・355竪穴住居址

これらは290･291号竪穴住居址の南に軸を揃えて検出された．297･355号住居址はそれぞれ291・290号住居址に切られており，また攪乱によって北側のプランは不明である．297号住居址は幅6.4m，355号は幅5.4m，両者とも上面の削平が著しく，深さは10cm足らずである．72号溝が埋没したのちに造営されている．297号住居址では硬化した床面が確認された．297･355号とも竈の跡と思われる焼土が確認されたが，297号は東壁，355号は西壁に作られている．支柱などは確認されなかった．

写真26　355号竪穴住居址（南より）

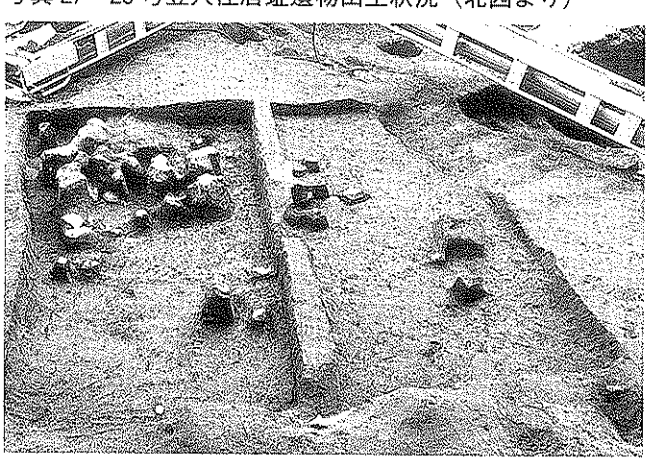


古代Ⅱ期の竪穴住居址

25号竪穴住居址（図10）

80・30号竪穴住居址と重複して検出された．軸は南北方向より若干東に振れている．縦2.5m，幅3.2m，検出時の深さは20cmである．住居址中央で硬化した床面が確認された．床面には遺物や焼土，砂岩のブロックが散在していた．南東隅に焼土や粘土の入った浅い掘りこみが検出され，精査した結果竈の支柱が確認された．

写真27　25号竪穴住居址遺物出土状況（北西より）



遺物は土師器と須恵器が出土した（図11）．図中の13～16・18はこの時期のものとしては古く本来は80号竪穴住居址に伴うものと考えられる．土師皿のなかに墨書

図10　25・300号竪穴住居址実測図（1/50）

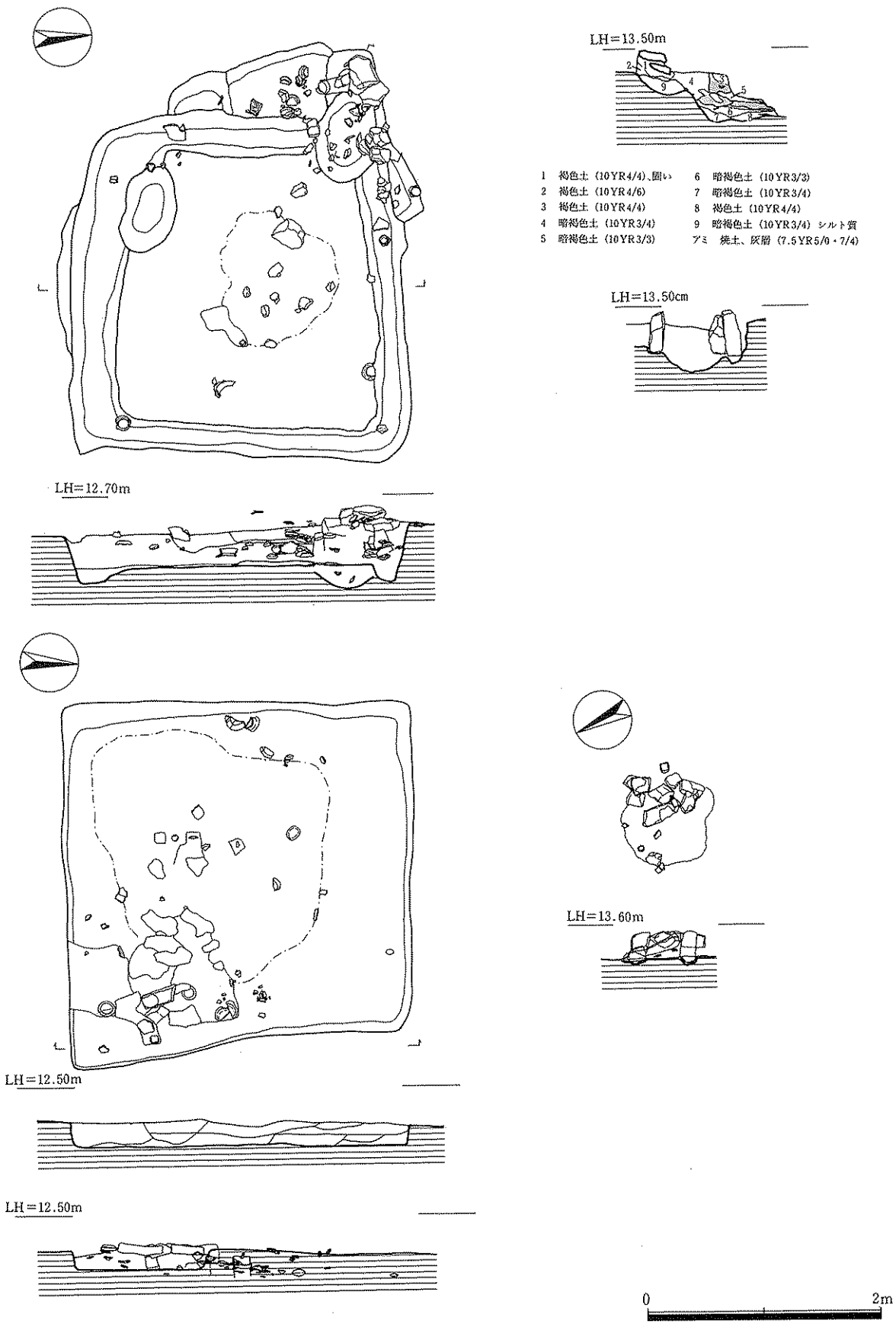
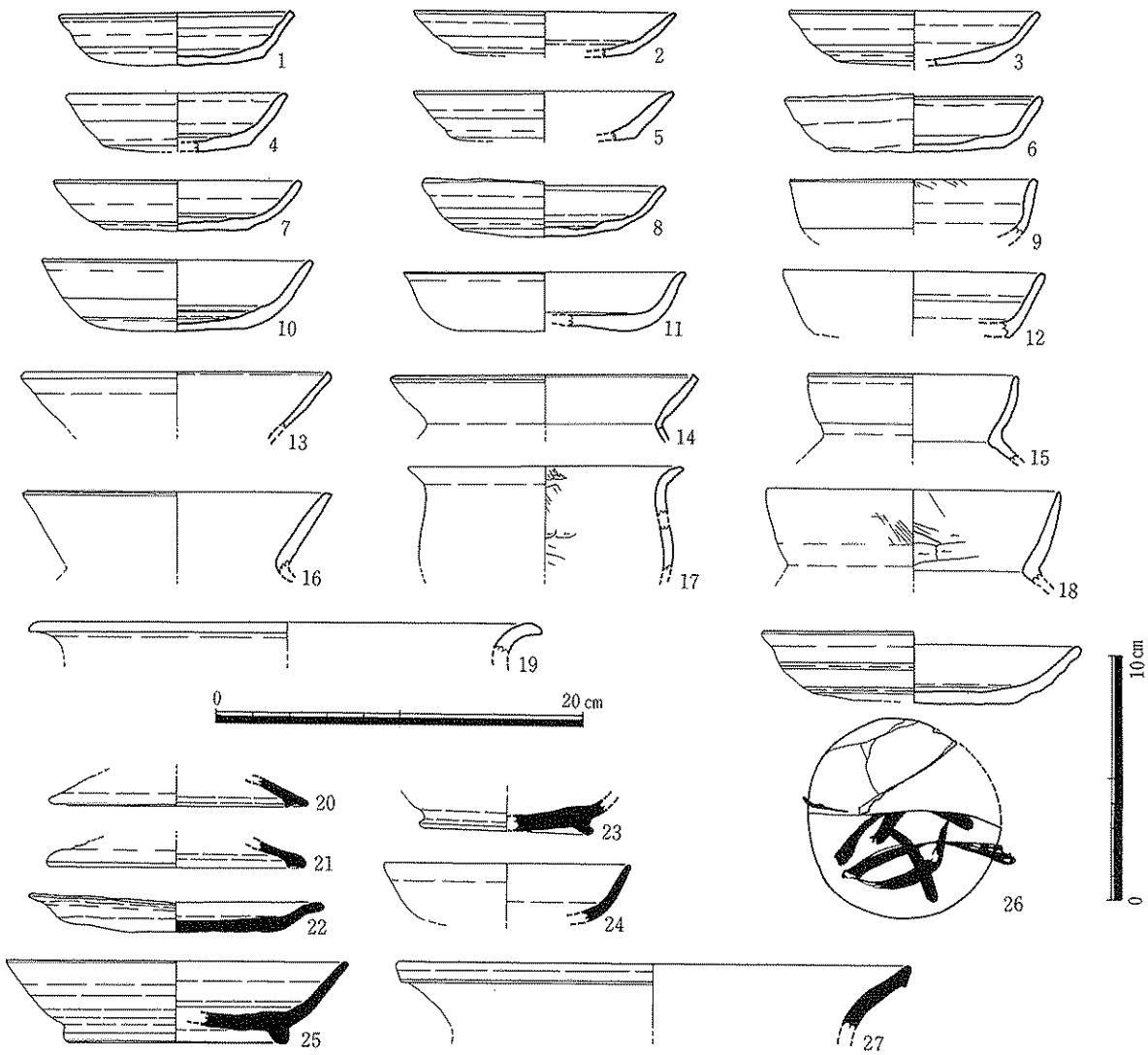


図11　25号竪穴住居址出土遺物実測図（1/3・1/4）



を持つものが含まれていた．8世紀末から9世紀前半が住居址の設営時期であろう．

写真28　25号竪穴住居址竈（北西より）

300号竪穴住居址（図10）

調査区北側の中央で検出した．軸は南北を向き，3m四方である．検出時の深さは50cmである．東壁に一段浅く張り出す部分があるが，これは南東隅に設けられた竈に伴うものと考えられる．住居址の中央では硬化した床面が確認されたが，柱穴は検出されなかった．また，

写真29　300号竪穴住居址（西より）

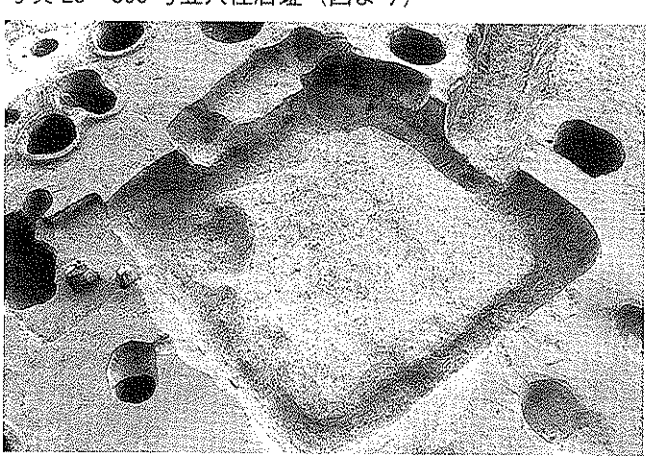
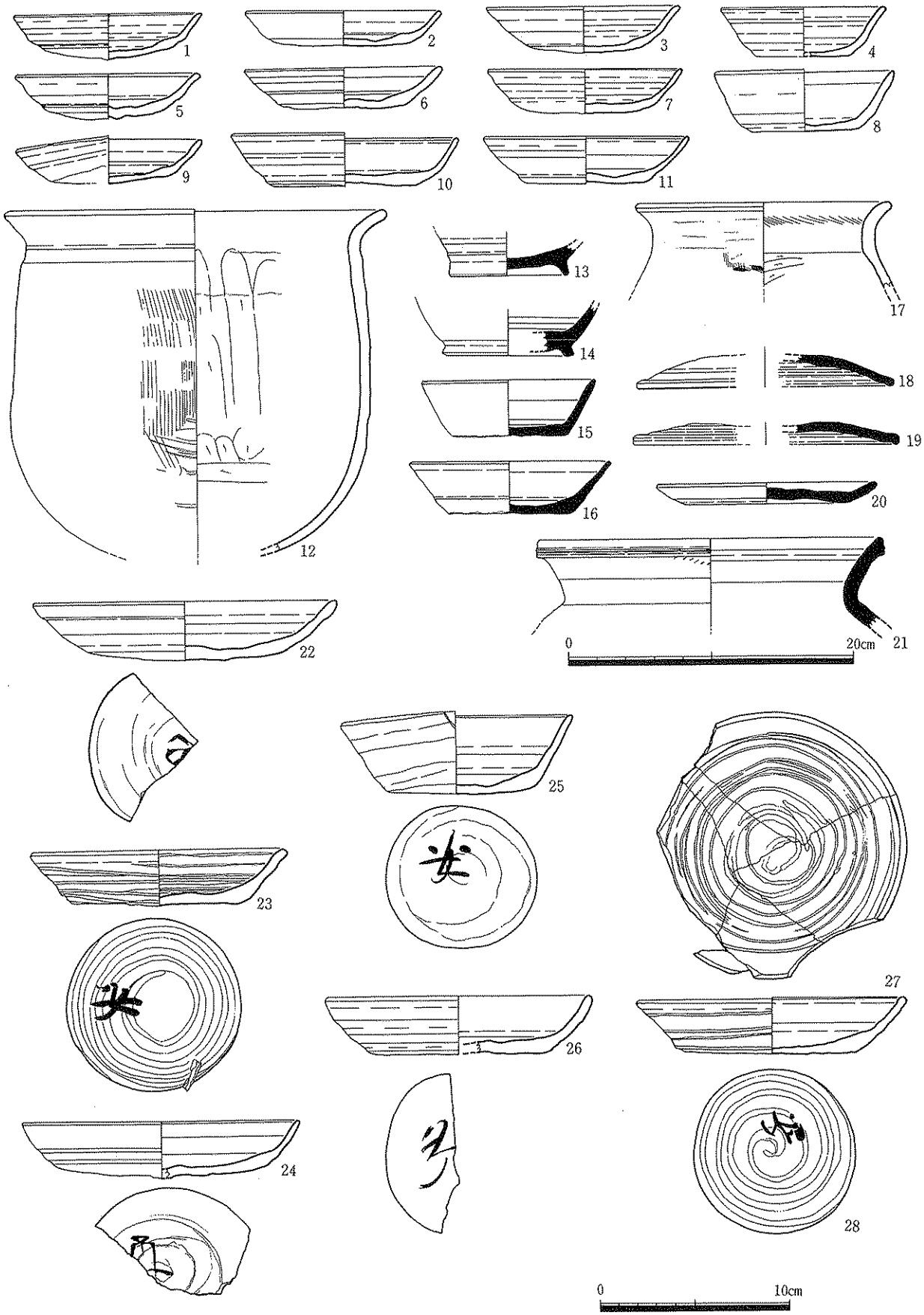


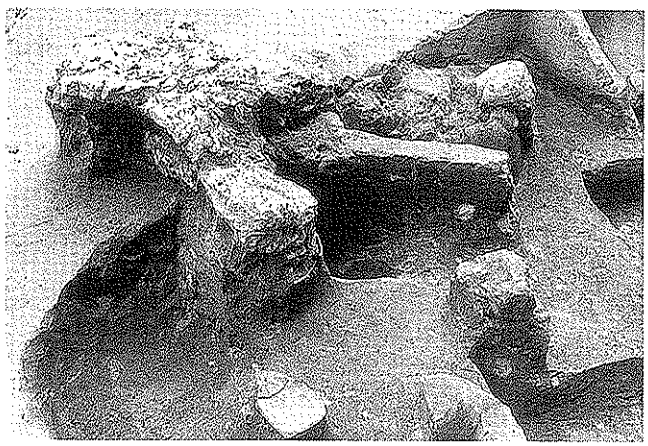
図12　300号竪穴住居址出土遺物実測図（1/3・1/4）



床の周囲には壁にそって幅 20cm 深さ 15cm の溝が廻らされている．

遺物は土師器と須恵器が出土した（図 12）．6 枚の土師皿には墨書があった．このうち 23・25・28 は同じ文字であるが，筆跡は全く違っている．これらも 8 世紀末から 9 世紀前半の遺物である．

写真 30　300 号竪穴住居址竈（西より）



157 号竪穴住居址

調査区の北西隅で検出した．北側と西側が調査区外に延び，東側は排水管によって既に破壊を受けているため全体のプランは確認できなかった．床面には土師器や須恵器などの遺物が散在していたほか，硬化した床面も確認できた．調査区の北側の壁に竈が露出していた．精査した結果支柱などが確認された．9 世紀前半の設営と考えられる．

258 号竪穴住居址

360 号竪穴住居址と重複して検出した．東半分が既に削平されていた．現状で縦 3.6 m，幅 3 m で軸は少し西に振れる．住居の中央では硬化した床面を確認したが，柱穴は不明である．住居址の方向が 360 号住居址と同じであるが，500 号掘立柱建物を切っており，時期は 8 世紀後半以降である．詳細な時期は遺物の検討を待ちたい．

写真 31　157 号竪穴住居址（東より）

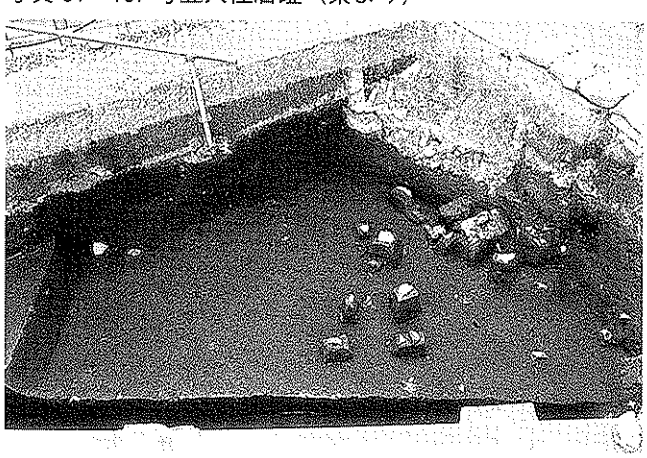
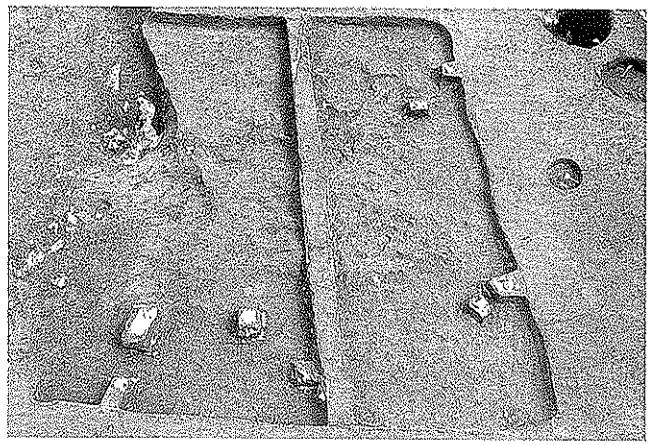


写真 32　258 号竪穴住居址（北より）



〈掘立柱建物址〉

今回の調査で 6 棟の掘立柱建物址が確認された．いずれも軸は南北方向である．500・501 号以外は，調査区の北西側外に広がっており，全体の確認は出来なかった．

500 号掘立柱建物址（図 13）

Ⅱ区北側中央で検出した．南北に軸をとる桁行 5 間，梁行 3 間の掘立柱建物である．72 号溝が埋没した後 355 号竪穴住居址の上に設営されている．柱間は桁行・梁行とも 1.8 m～2m である．柱穴は径が 55cm ～ 70cm，柱痕は径 25cm である．検出面からの深さは 30cm ～ 80cm である．遺物が乏しく詳細な時期決定は難しいが，建物の方位から 8 世紀後半以降と考えられ，355 号竪穴住居址を切る事から 8 世紀代も終り頃の可能性があろう．

501 号掘立柱建物址（図 13）

500 号掘立柱建物址の 4 m ほど西側で検出された．500 号と軸を揃えている．南側が撹乱のため不明だが，500 号と同じ 3 間× 5 間の建物であったと思われる．調査終了後に認定した．柱間は 1.8 m～2 m，柱穴は径が 55cm ～ 8cm，柱痕は径約 25cm，検出面からの深さは 30cm ～ 50cm である．設営時期は 500 号と同じ頃と思われる．

写真 33　500・501 号掘立柱建物址（北より）

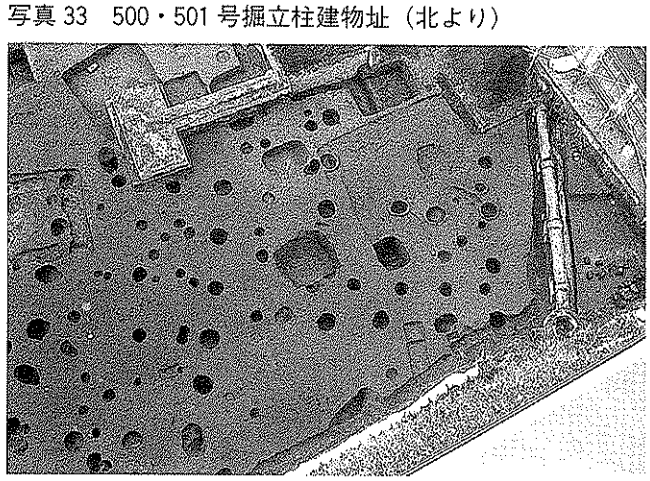
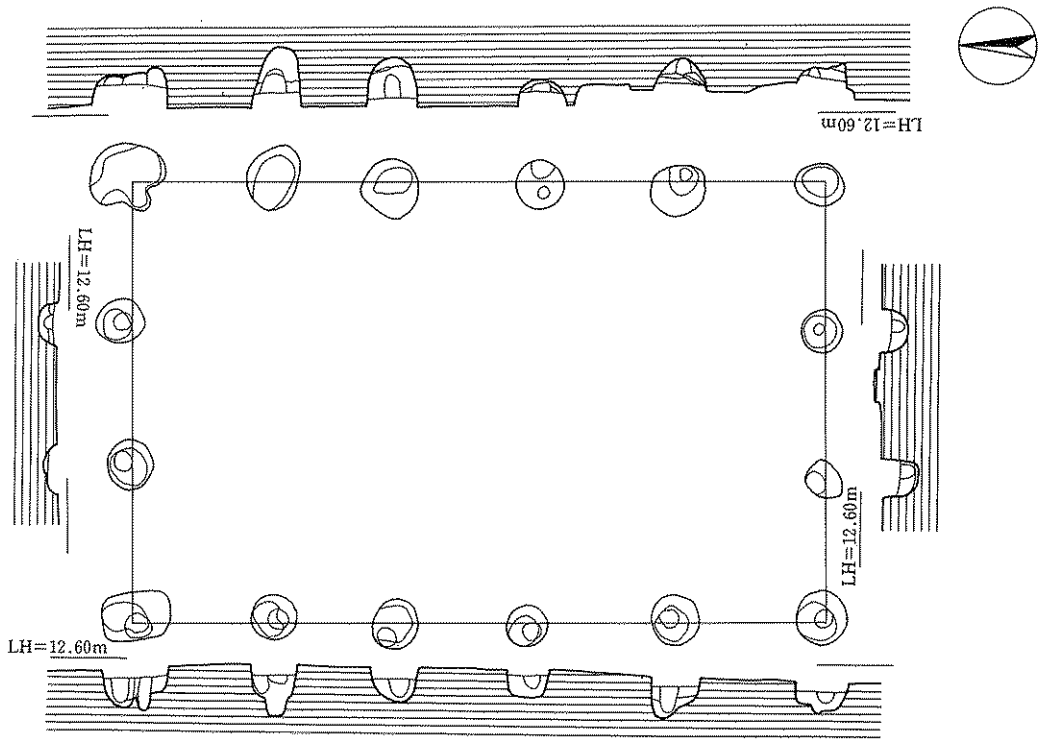
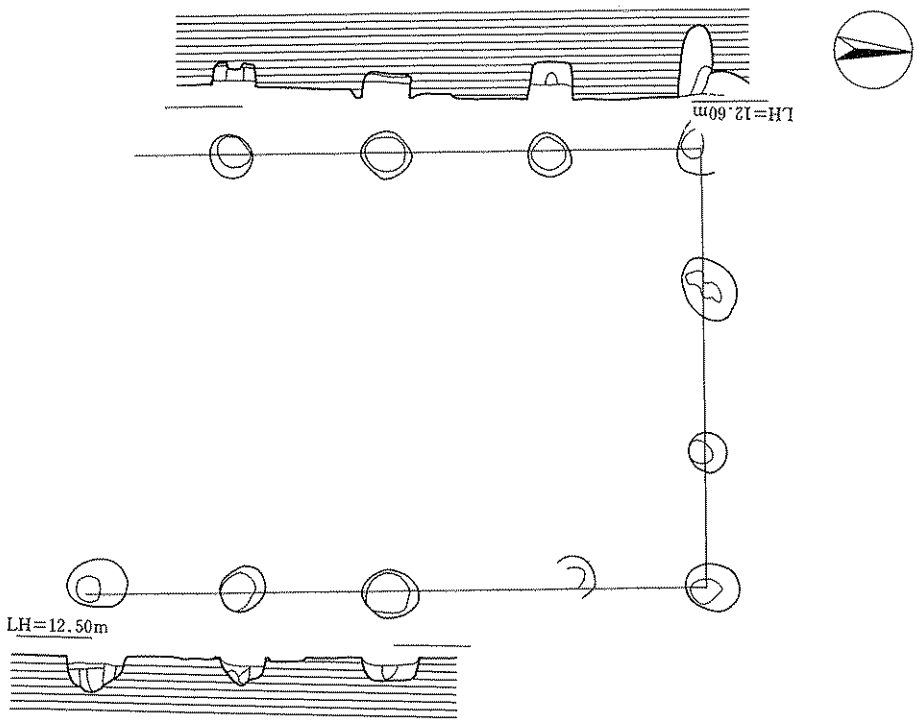


図13　500・501号掘立柱建物址実測図（1/100）





502号掘立柱建物址

355号竪穴住居址と500号掘立柱建物址と重複して検出した．北半分が調査区以北に延びるため全体は不明である．桁行3間以上，梁行3間の建物である．調査終了後に認定した．軸は南北をとり500号と向きを揃えている．柱間は桁行が約1.9m，梁行が約2.3mである．柱穴は径が50cm～80cm，柱痕は15cm～20cm，深さは50cm～60cmである．355号住居址を切っているが500号との前後関係は判断し難い．

503号掘立柱建物址

調査区の北側中央付近で検出した．調査終了後認定した．北側が調査区外に延びるのか不明である．現状では桁行4間，梁行2間である．軸は南北を向いており上記の掘立柱建物と方向を揃えている．柱間は桁行で1.9m～2m，梁行で1.9m，柱穴は40cm～70cmである．

その他掘立柱建物となると思われるピットが4棟分あると認識している．いずれも南北方向を向くが503号に重複する504号（現状1間×5間）は軸が東に振れている．

〈その他の遺構・遺物〉

胞衣壷（図14）

30号竪穴住居址の北壁外で検出した．土師器の甕に須恵器の蓋をしていた．中には土の流入もなく，密閉状態が保たれていた．8世紀後半のものと思われる．

写真34　115号胞衣壷（西より）

土壙墓（図14）

Ⅱ区において1基土壙墓が検出された．4号溝の西端付近である．1/3程現代の建物の基礎工事により破壊されまた骨の依存状態も良好とはいえないが，埋葬の様子は確認できる．頭位は北で仰臥しており，足は軽く曲げていたと思われる．胸部あるいは腹部で手を合わせていたようだ．副葬品としては左肩付近から刀子が1本と右ひじ部分から土師器の小皿1枚が出土した．

祭祀遺構

4号溝の調査区中央付近の底で，馬と思われる動物の頭部骨が検出された．水に関する祭祀が行われたと思われる．

図14　115号胞衣壷・250号土壙墓（1/4・1/40）

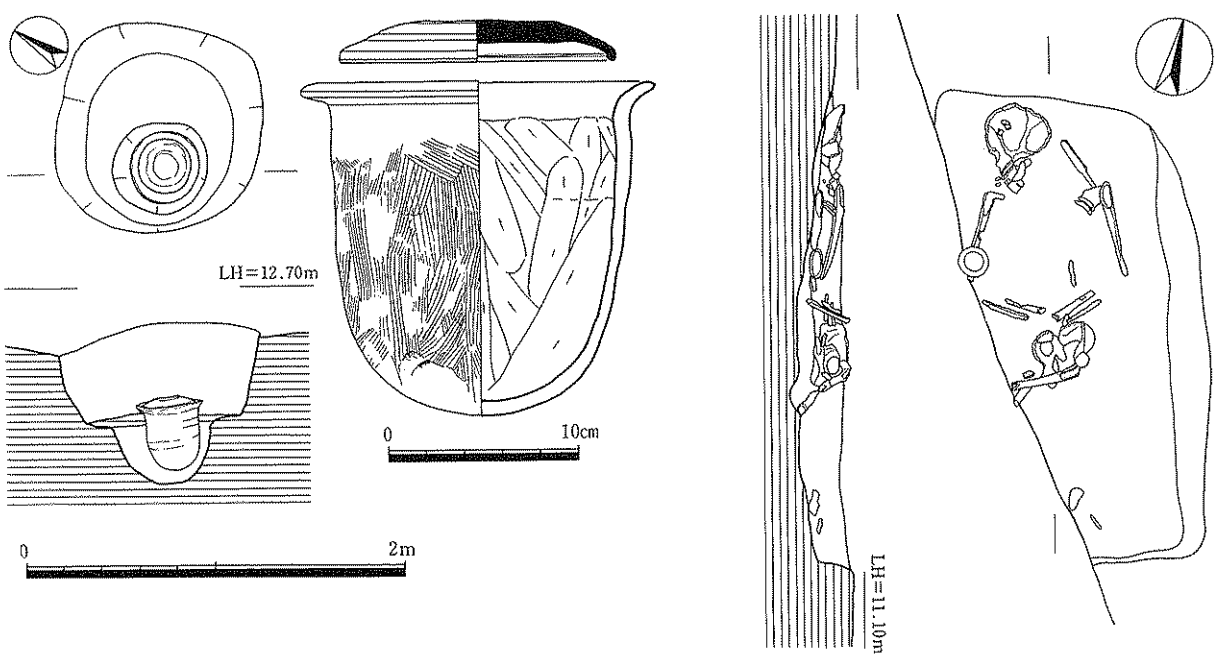


写真 35　250 号土壙墓（南より）

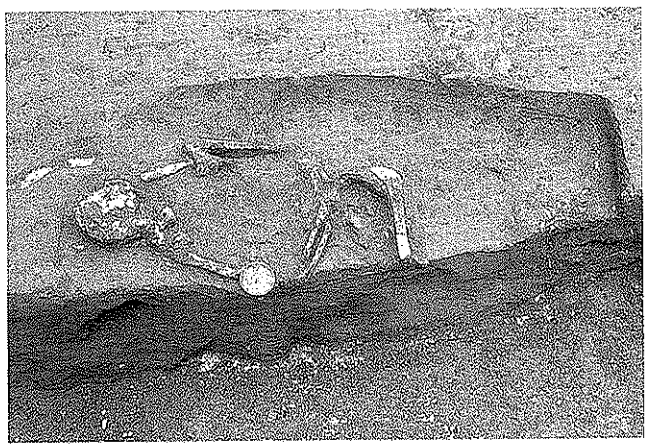
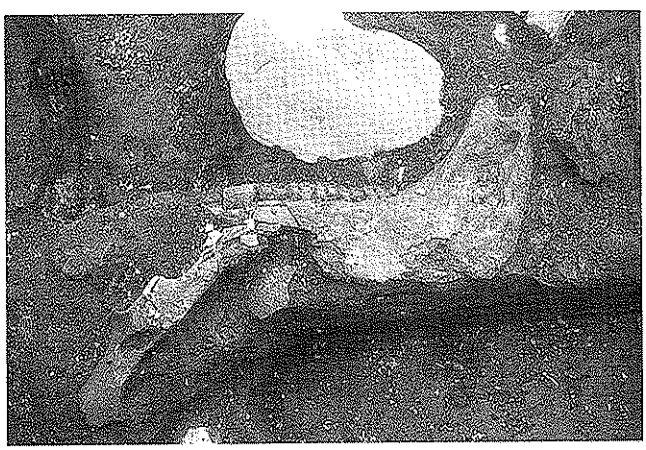


写真 36　馬骨出土状況（西より）



鉄製品（図 15）

6 点の鉄製品が出土した．鎌，釘，刀子，鏃がある．4 は土壙墓の副葬品である．

土製鏡（図 15）

遺構検出時に 297 号竪穴住居址付近で出土した．径が約 4cm 程度である．鈕の部分を摘み上げてつくり，穴を一方より穿っている．

玉類（図 15）

平玉（8）と垂玉（9），臼玉（11），ガラス製小玉（10）が出土した．

平玉は径 2.65cm，厚さ 3mm，径 2mm の穴を二つ開けている．

臼玉は長さ 4mm，径 7.3mm，孔径 2mm である．滑石製．

垂玉は長さ 10.5mm，最大幅 10.3mm，厚さ 4.65mm である．不定形な台形をしており，垂飾出来るように 2mm の穴を開けている．薄い緑と濃い緑のまだら模様である．結晶片岩様緑色石材と思われる．

ガラス製小玉は長さ 4.9mm，径 5.2mm，孔径 1.7mm である．コバルトブルーである．

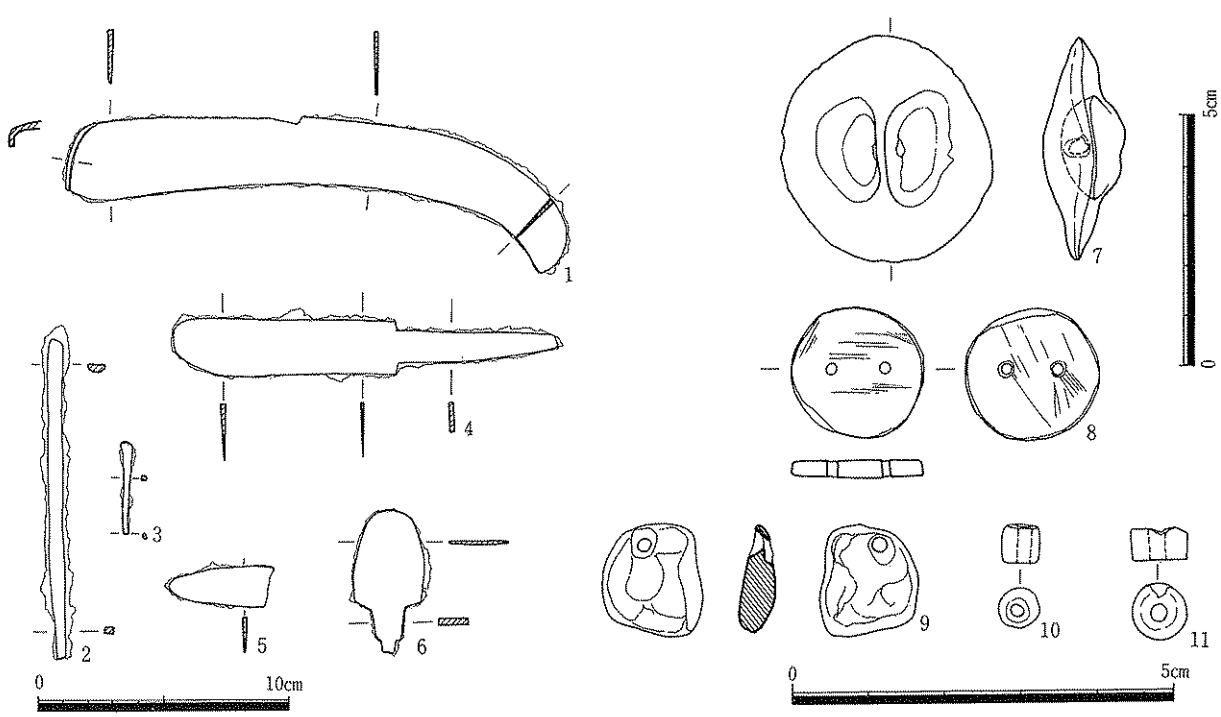
石器（図 16）

35 号竪穴住居址付近の地山層から縄文時代の黒曜石製の石鏃と剥片が出土した．

4. 成果と問題点

1996 年に本荘北地区で行われた調査（9601 調査地点）で，初めて古墳時代前期の竪穴住居址が確認された．それは 9601 調査地点の最も西に位置しており当該期の遺

図 15　鉄製品・土鏡・玉類実測図（1/1・1/3・2/3）



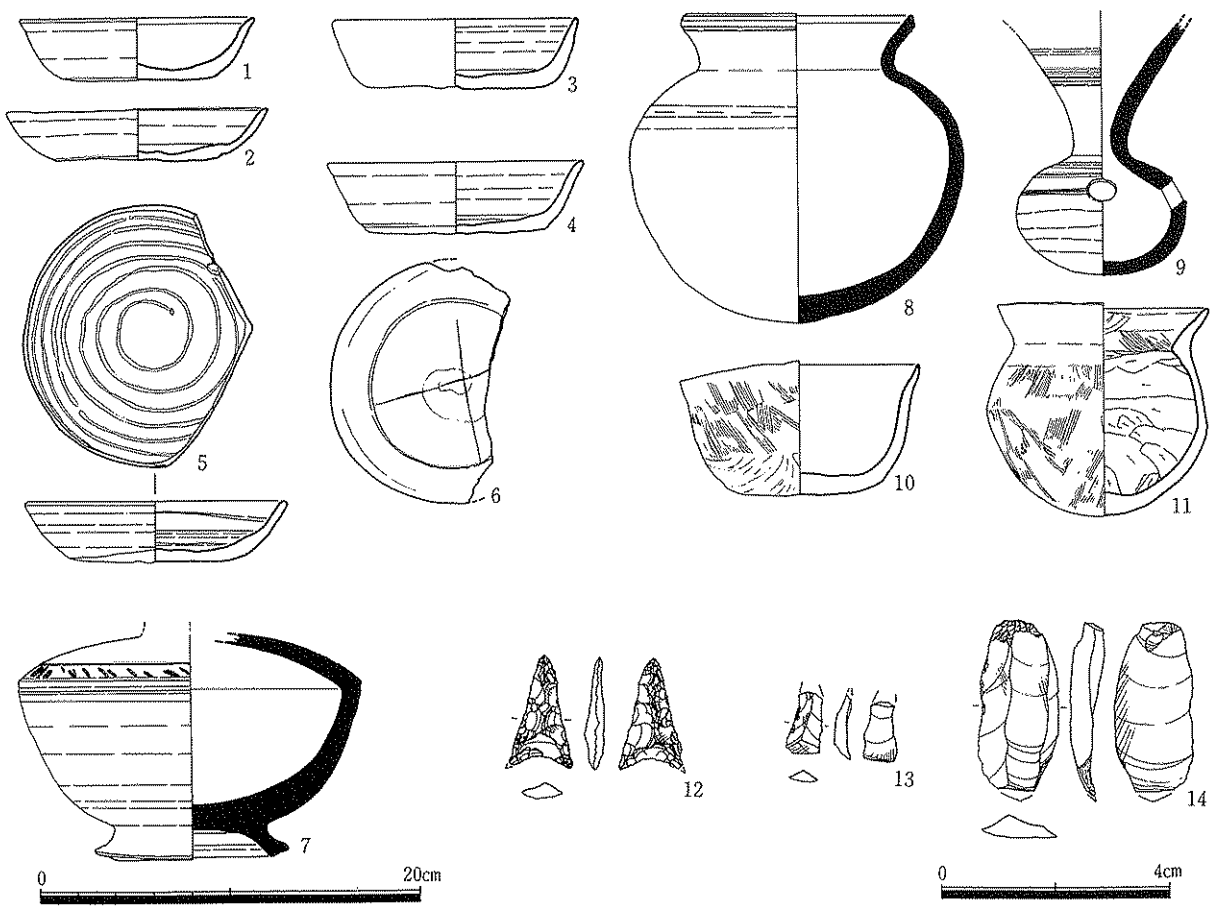
構は西側に広がるものと予想されていた．本調査区ではその予想通りに古墳時代前期の遺構が検出され，遺物も良好な状態で量的にも恵まれて得られたことは大きな成果である．

遺構については9807地点において条里施行以前（7世紀代～8世紀初頭）・以後（8世紀後半～）の建物の方向性が確認されたが本調査ではさらに遡る時期の方向性を確認できた．さらに古墳時代の遺構の中で最も古いと考えられる3･5号竪穴住居址と同じく古墳時代の竪穴住居址である35・113号等とでは建物の軸がずれており，古墳時代から古代にかけての時期においても細分が可能のようである．規模にも大小があり，方位や規模についての検討が今後の課題である．

遺物についても幅広い時期の遺物が出土した．特に古墳時代前期の遺物は本荘地域の当該期の研究に先鞭をつけるものである．また昨年度から行っているウォーターセパレーション（水洗選別）でも，炭化した米等が発見されており，成果をあげている．今回提示できた遺物は出土遺物の1割程度のものである．遺構に伴うという好条件に恵まれており，遺構の細分のためにも整理・精査が望まれる．

前年度末に行った本調査の事前工事に伴う立会において（9805調査地点），竪穴住居址を確認しており集落はさらに西へと広がる．一方8世紀後半以降の遺構も東・北の調査区外へ延びており，白川に沿って9601調査地点付近まで広がることが予想される．今後，これらのことに留意して調査に臨みたい．

図16　その他出土遺物実測図（2/3・1/4）



Ⅱ－2　９９０７調査地点

1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の文学部・法学部・教育学部・大学教育センター（旧教養部）・工学部・理学部の所在する黒髪地区は，周知の黒髪町遺跡群（熊本市遺跡地図№8－88）内にある．阿蘇南郷谷に発した白川は永年の土砂運搬と増水・氾濫を繰り返して熊本平野を形成し，中流域では両岸に河岸段丘を発達させている．白川は大学付近で小刻みに蛇行しやがて穏やかに下流域へと下る．本遺跡は白川右岸に展開する河岸低位段丘上（標高18～25ｍ），立田山（標高151.6ｍ）の南山麓部に位置する．

周辺遺跡としては，小峰遺跡，黒髪町下立田遺跡群，カブト山遺跡，龍田陳内遺跡などが，白川を挟んだ対岸には渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡，大江遺跡群が所在している（図1）．

2. 調査の概要

年度当初には計画されていない事業であった．平成10年11月初めに工学部より，実験用プレハブを取設したいと依頼があった．しかし年度末についた補正予算により急遽理学部自然科学等総合実験棟新営に係る調査（9810）を優先して行い，この調査終了後に医学部附属病院病棟新営工事に係る調査（9901）を実施することとなった．理学部の調査は年次報告書の作成期間中であったため一部の業務を委託して小畑が調査にあたり，また病棟新営工事は調査面積から推して調査員一人では半年以上かかると予測され，調査期間短縮のため小畑・大坪が二人で現場に係らなければならず，プレハブ取設に伴う調査は上記の調査が終了するのを待って実施された．

9月17・20日両日で一次掘削を終了し，9月22日より作業を開始した．期間中，大きな被害をもたらした台風の通過があった．そのような困難のなか参加していただいた作業員の皆様には感謝いたします．

〈調査面積〉

136.5㎡

〈調査期間〉

1999年9月22日～10月5日

〈調査者・参加者〉

大坪志子．

岡田イツ代，押方富江，河野義勝，小細工洋子，白石亜紀，白石美智子，高松北子，溜渕俊子，番山明子，福田久美子，堀川貞子，松井昭子，水上順子，村上幸子，森田ミドリ．

写真37　調査区全景（南より）

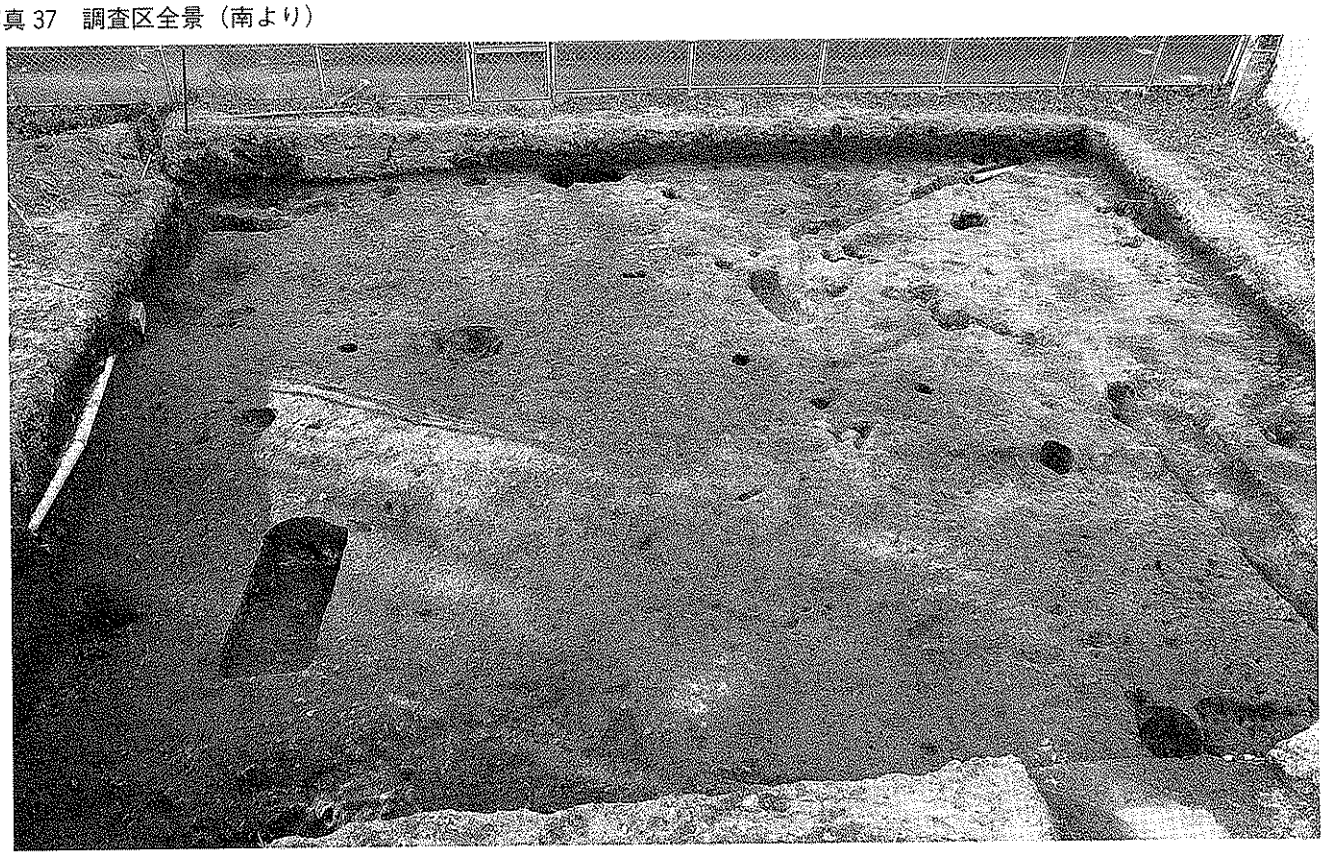
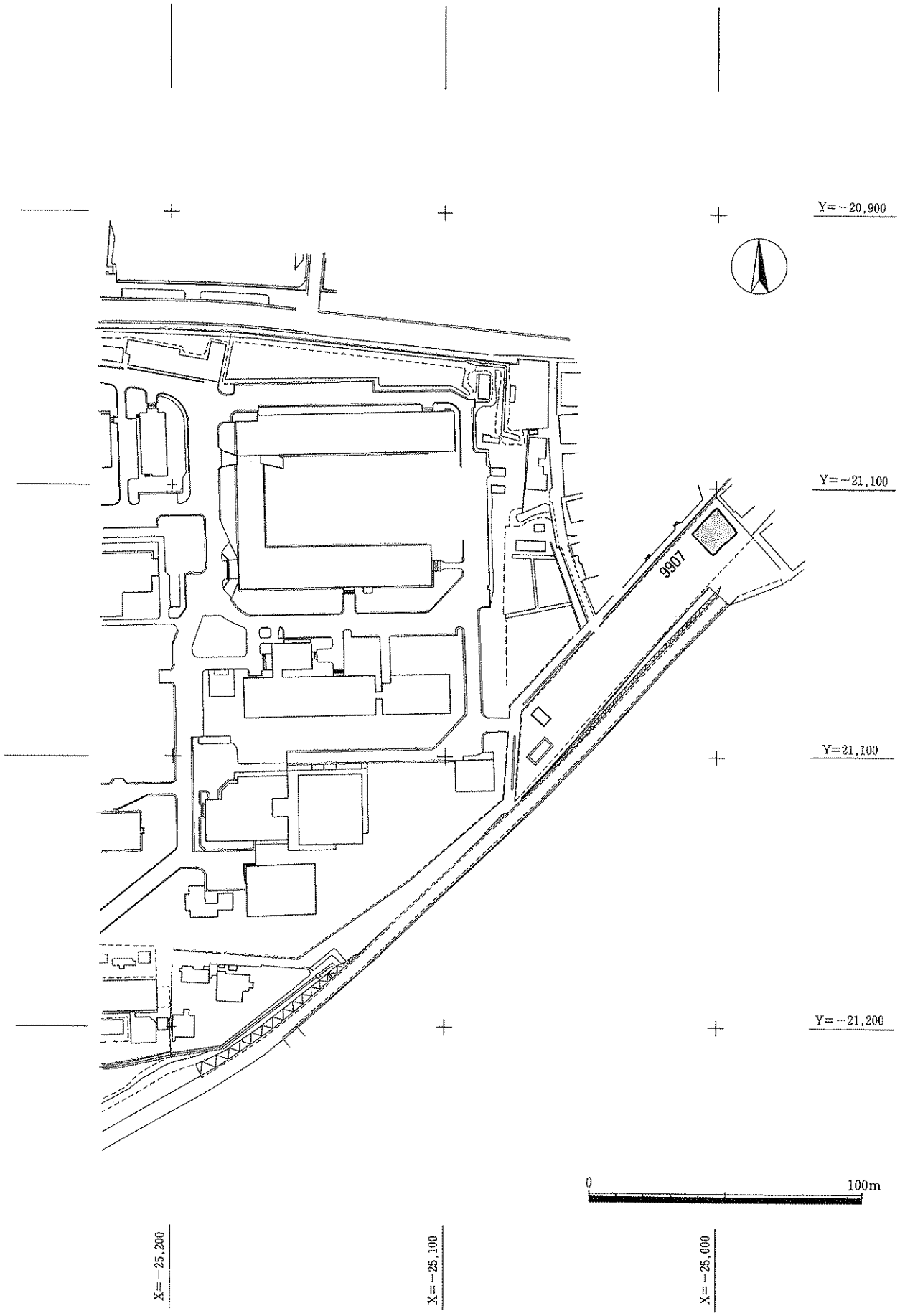
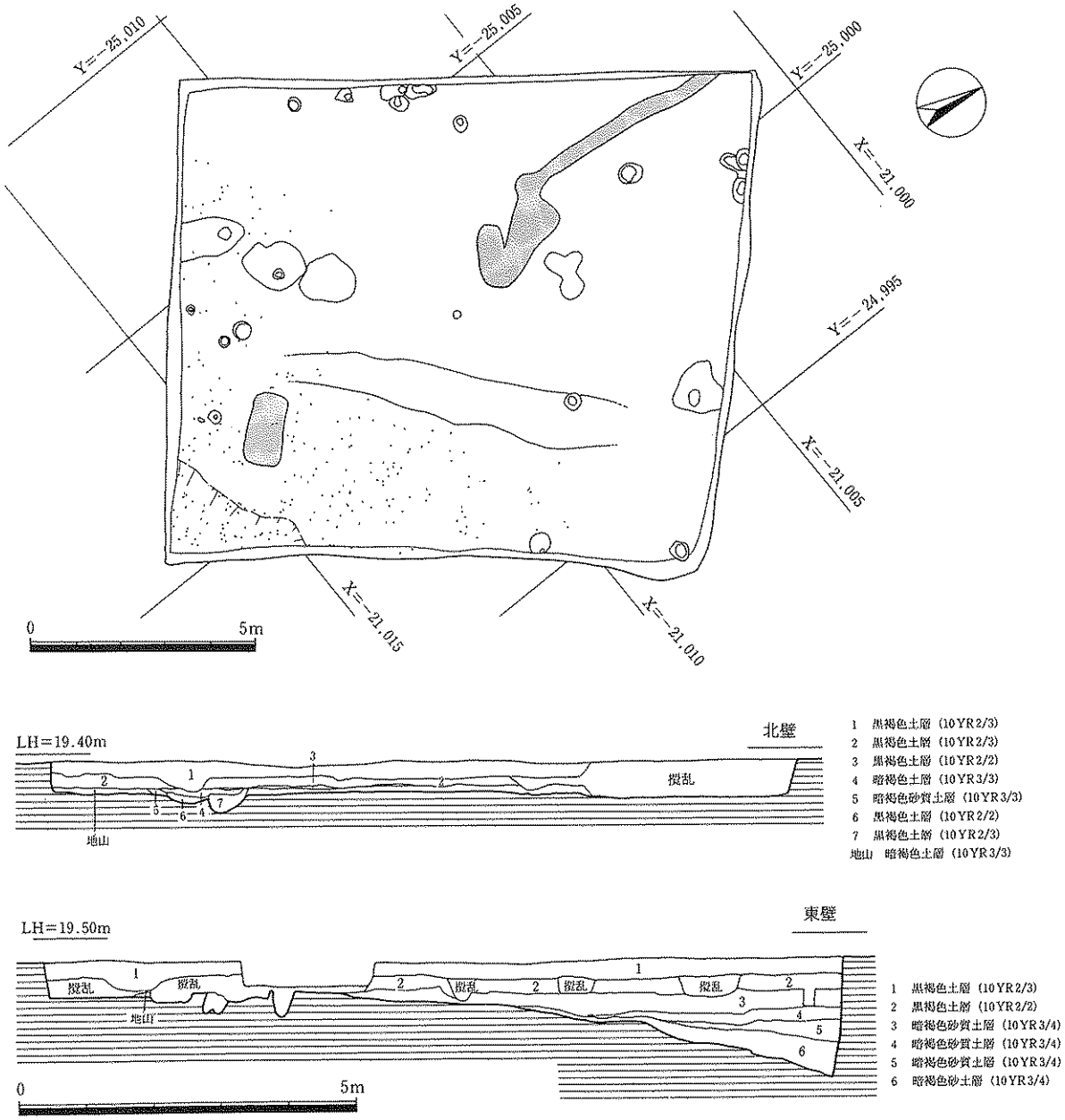


図17　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅱ−2　９９０７調査地点

図18　9907調査地点遺構配置実測図・壁土層断面実測図（1/150・1/100）



3. 調査の結果

a　基本層序

今回調査したのは，白川右岸の標高19 m前後の地点にあたる．南側には堤防が控え，すぐに白川の流れとなる．調査対象地は以前に工友寮という学生のための寮施設があった跡地である．基本層序は以下のとおりである（図17）．

Ⅰ層（黒褐色10YR2/3）・Ⅱ層（黒褐色10YR2/2）は現代埋土および跡地整備時の客土であろう．Ⅲ層（暗褐色10YR3/4・厚さ30cm）は他の調査地点において通常地山層と呼称している遺構が掘込まれる層である．きめ細かく粘性の少ないきれいな土である．縄文時代の遺物包含層でもある．Ⅳ層（暗褐色10YR3/4・厚さ20cm）は土の質はⅢ層と同じである．色調の表記では同一となるが，Ⅲ層と比べると赤味が強く鮮やかなオレンジ色という感じである．縄文時代の遺物も若干含まれていた．Ⅴ層（暗褐色10YR3/4・厚さ30cm）はⅢ・Ⅳ層に似た土に砂岩ブロック（にぶい黄褐色10YR4/3・厚さ10～30cm）が入る．遺物は含まれない．Ⅵ層はⅤ層の土に多量の川砂が入る．

地山はⅤ層に入るブロックが基盤となる土で，黒髪北地区の9802調査地点において，調査区の南側半分で検出された地山と同じである．9802調査地点では，この地山直上で縄文時代早期の押型文土器が多量に出土した．

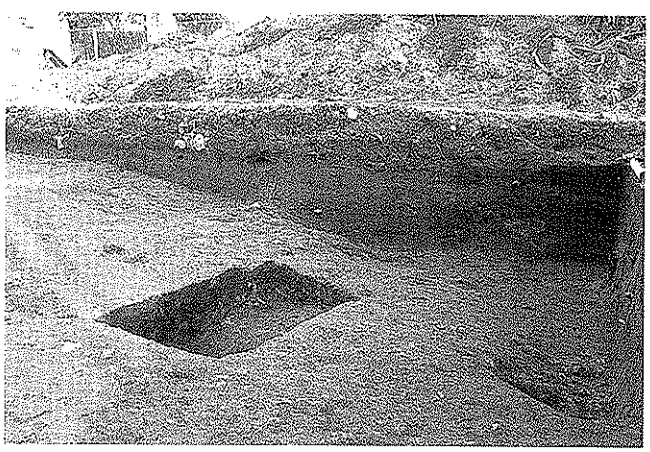
本調査地点では一部を除くと地表面下50cmで地山となり，これまで調査された黒髪南地区の様子と比較すると非常に浅い．

b　検出遺構と遺物

本調査地点は，地山の遺構検出面までの土が現代埋土であり，工友寮の建設と解体・整地の際に削られたようで，地山は本来もう少し高かったものと思われる．今回の調査では，10個程度のピットと旧河川敷につながるかと思われる落ち込みを一部確認したほかは，遺構は検出されなかった（図17）．M4・M5ピットから縄文土器が出土した．これらと同じ埋土をもつピットも同様な時期と考えられるが，これらが柱穴などを示すような規則性はなく，その他遺構と思われる掘込み等は伴わない．

地山は調査区の南隅にむかって傾斜しており，Ⅲ層・Ⅳ層はこの落ち込み部に堆積していた．遺物が分布する範囲を堺に白川に向かって緩やかに傾斜し，図17中に示した傾斜変換線から急激に深く落ち込んでいた．

写真38　調査区南隅傾斜部分（北より）



Ⅵ層以下は川砂と円礫が多量に入っており，周囲に一様に広がっていたことからこれらは炉などの遺構ではないと思われる．傾斜がやや急激ではあるが旧河川の作用により堆積した層で，あるいは昔の河川敷につながるものではないと考えられる．遺物は縄文土器が出土した．包含層であるⅢ層とⅣ層の広がりに対応して調査区の南隅に集中して分布している．

写真39　縄文土器出土状況（北西より）

出土した土器は砕片が多く，部位や器種まで判別できるような良好な資料は少ない．前期から晩期までの土器がある．

図18の1～3は無文の土器で，3は口縁に刻目がある．4～26までは条痕文をほどこす轟式土器である．30・32は無文の土器底部である．時期は判定し難い．28は御手洗式，34･35は北久根山式系の土器であろう．34は口縁径が小さく壷の頚部のような形態で，須恵器の高坏の脚部に見られる四角形の透かしのような穴を内側から穿っている．36は後期の三万田式土器である．37は「く」の字に強く外反した口縁部で，条痕を施しており器面は内・外側とも良く研磨されている．38は刻目突帯の部分である．

出土した全ての土器の詳細については検討の途中であるが，現在のところ前期の土器も晩期の土器もⅢ層からあるいはⅣ層から出土しており，層位的に時期を分離することはできない．Ⅲ層に遺物が集中しており，時期も分離できないため，Ⅲ層は2次的な堆積によるものであろう．

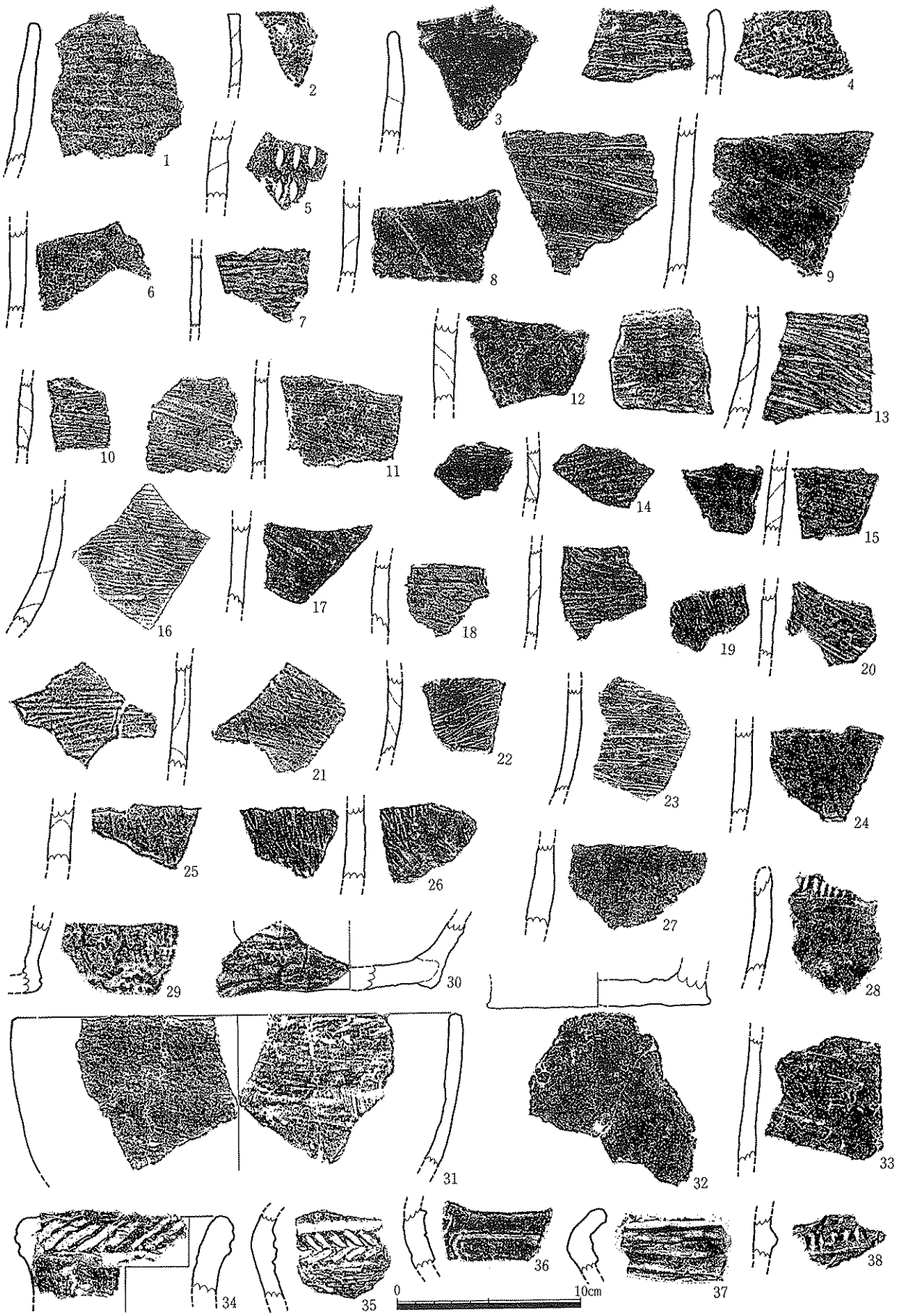
4. 成果と問題点

今回の調査では，遺構の検出がなく遺物の出土も少なかった．

9802調査地点では，地山層と認識している黄褐色土層に縄文土器が含まれることを確認した．砂岩ブロックを含む基盤の層の上に堆積している黄褐色土層の上部には縄文晩期の土器が含まれ，また下方（基盤の層の直上）では縄文早期押型文土器が多量に出土した．本調査区でも同様であった．9802地点の黄褐色土層と本調査地のⅢ・Ⅳ層は同じ層として調査したが，Ⅲ・Ⅳ層からは前期を遡る資料はなく，遺物の様子から二次堆積層のようである．Ⅴ層は基本的に地山とⅣ層との漸移層と考えるが，Ⅴ層からの遺物の出土もなかった．9802・9907の両地点を直接的な比較は難しいが，この縄文時代の遺物包含層は早期とそれ以降の時期に大別できる可能性はあると考える．

調査地点により若干の差異があるが，今後の調査ではこの黄褐色土層に掘りこまれた遺構の確認・調査とともに，縄文時代の遺物・遺構の確認を今まで以上に意識しなければならないであろう．

図19　9907調査地点出土遺物実測図（1/3）



Ⅱ－3　９９０８調査地点

1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・大学教育センター（旧教養部）・工学部・理学部の所在する黒髪地区は，周知の黒髪遺跡群（熊本市遺跡地図№8-88）内にある．遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山（標高151.6 m）の南山麓部，白川右岸に展開する河岸低位段丘（標高18～25 m）上に位置する．熊本平野南部は，阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており，本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する．

周辺遺跡としては，背後の立田山裾に小峰遺跡，黒髪町下立田遺跡群，カブト山遺跡，龍田陳内遺跡などが，白川を挟んだ対岸に，渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡，大江遺跡群などがある（図1）．本調査区は黒髪東地区の東端にあたる．

2. 調査の概要

今回の調査は教育学部附属養護学校の給食室の増築に伴う発掘調査である．養護学校側と協議の上，11月24日より発掘調査を実施することとした．

〈調査面積〉

42㎡

〈調査期間〉

1999年11月24日・25日

〈調査員・参加者〉

小畑弘己．

黒木重信，黒木タケ子，古賀敬子，白石美智子，白石亜紀．

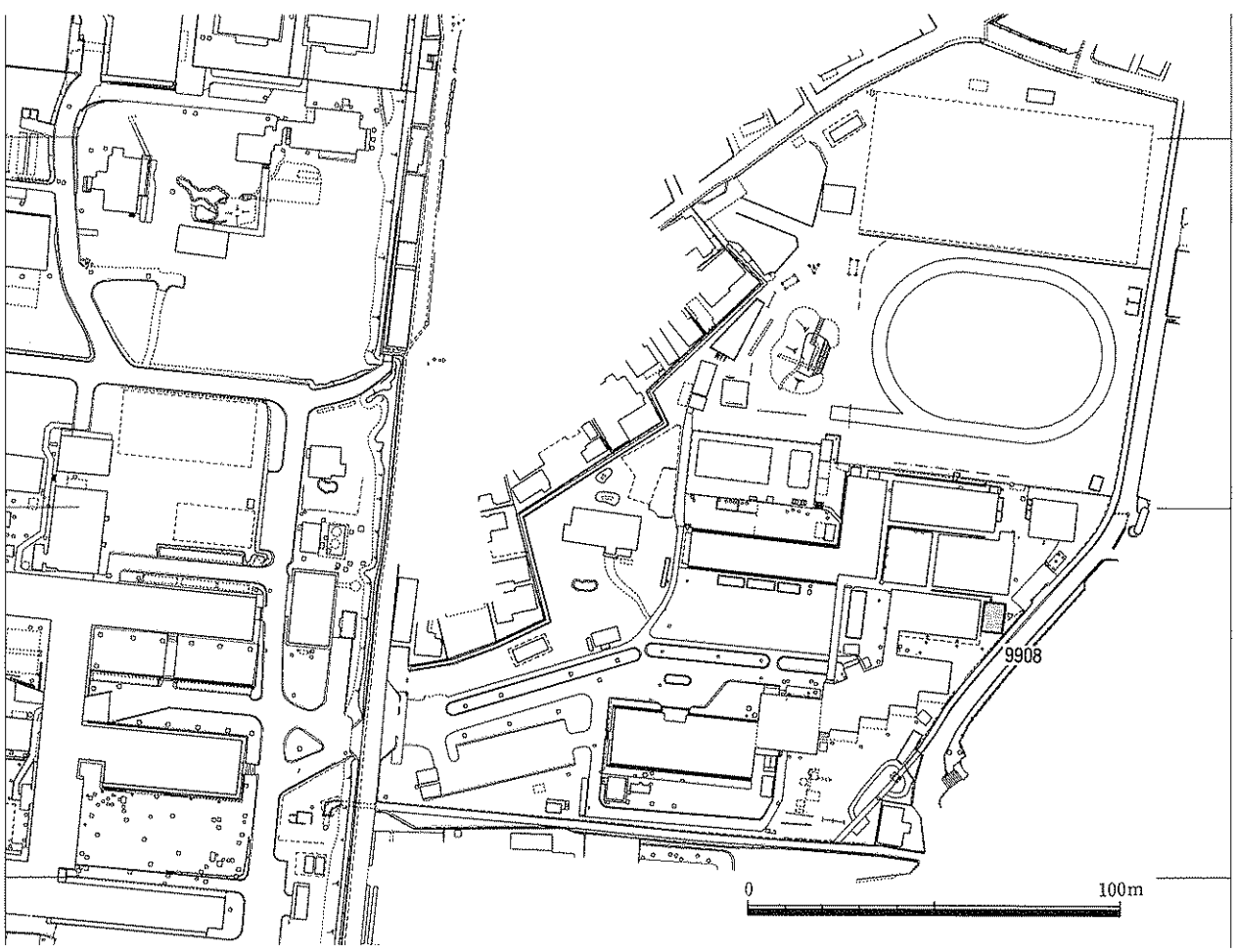
3. 調査の成果

a　基本層序

調査地の基本層序は，以下のとおりである．

Ⅰ層－表土（厚さ100cm），Ⅱ層－青灰粘土層（厚さ30cm），Ⅲ層－白灰色粘土層（厚さ50cm），以下礫混じり粘土層．

図20　9908調査地点位置図（1/2000）



b　検出遺構と遺物

今回の調査は調査面積が狭いため，南側と北側の２つに分けて調査を実施した．埋土であるⅠ層を除くと灰白色の粘土層（Ⅲ層）が現れ，部分的にⅢ層が堆積していた．Ⅲ層中より染付磁器片１点を検出したが，遺構らしきものは認められなかった．両地区にトレンチをそれぞれ１本ずつ設定して深掘したが，地表下２ｍくらい下まで礫や砂混じりの粘土層が堆積しており，この時点で調査を断念した．出土遺物は磁器１片以外にない．おそらく近世以降の所産であろう．

4. 成果と問題点

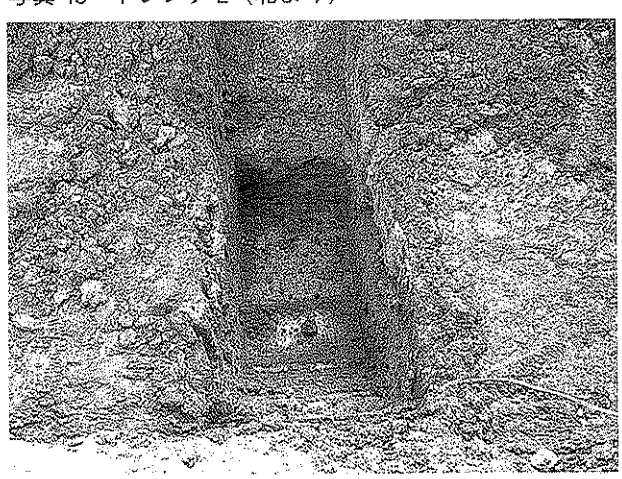
今回の調査では，近世以前に遡る遺構や遺物は検出できなかった．砂礫や粘土層で形成される本地点の土層の堆積状況は，以前に実施した9708地点の調査成果と同じく，本地点が以前の谷の一部にあたることを示している．この地点がいつ埋められたのかに関しては，西側に展開する古代集落との関連において，古地形を復元する上で重要な情報であるが，今回は調査面積も狭く，深掘りが不可能であり，明らかにできなかった．今後の課題としたい．

写真40　調査風景（北より）

写真41　トレンチ１（南より）

写真42　Ⅲ層出土状況（南より）

写真43　トレンチ２（北より）



Ⅱ－4　９９０９調査地点

1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・大学教育センター（旧教養部）・工学部・理学部の所在する黒髪地区は，周知の黒髪遺跡群（熊本市遺跡地図№8-88）内にある．遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山（標高151.6 m）の南山麓部，白川右岸に展開する河岸低位段丘（標高18～25 m）上に位置する．熊本平野南部は，阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており，本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する．

周辺遺跡としては，背後の立田山裾に小峰遺跡，黒髪町下立田遺跡群，カブト山遺跡，龍田陳内遺跡などが，白川を挟んだ対岸に，渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡，大江遺跡群などがある（図1）．本調査区は黒髪南地区の南西端で自然堤防が白川に最も突き出した部分にあたる．

2. 調査の概要

今回の調査は平成9年度補正予算によって年末に急遽浮上した事業である．建築課と協議の上1月7日に試掘調査を実施し，その結果畑跡の存在が確認され，要調査との回答を行った．1･2月は年次報告書作成のため調査の実施が困難であったが，2月中旬より調査を開始することとした．

遺構面までの掘削作業の終了を待って，2月14日より重機による遺構面検出・攪乱除去を行い，次いで作業員を投入した．現在1面目の遺構である畑跡を調査中であり，ここではこれまでの概要を報告し，以後の結果については次年度に報告予定である．

〈調査期間〉

2000年2月14日～3月24日

〈調査面積〉

1,853㎡

〈調査員・参加者〉

小畑弘己．

内田美穂，外野木亜紀，岡田イツ代，岡村久美子，押方富江，河野義勝，熊本茂仁，黒木重信，黒木タケ子，古賀敬子，小細工洋子，坂口三輝子，坂元紀乃，白石美智子，鈴木笙子，高橋久美，高松北子，田代理恵，溜渕俊子，橋口剛士，早田咲百合，番山明子，福田久美子，堀川貞子，松井昭子，丸山愛，三浦和之，水上順子，宮本千恵子，村上幸子，森川征子，森川護，森田ミドリ，安武寛文，矢羽田幸宏．

写真44　調査風景（北東より）

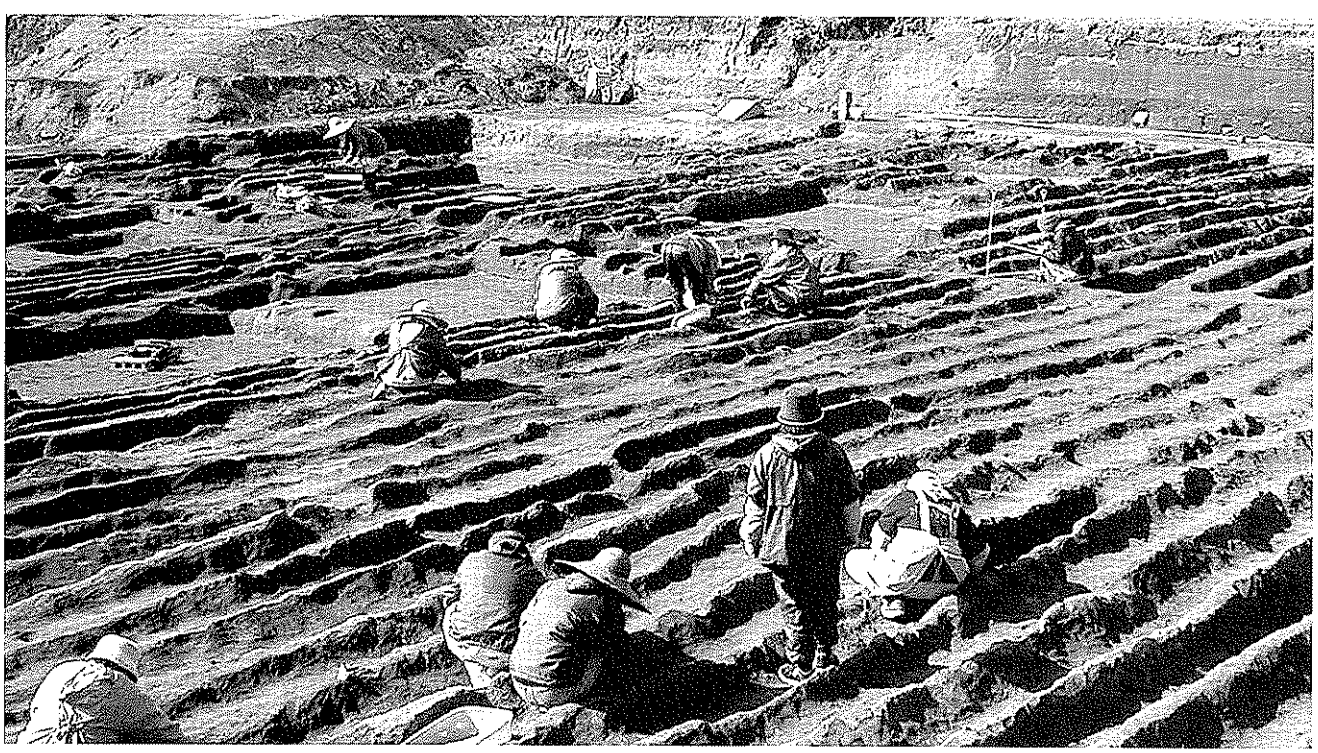
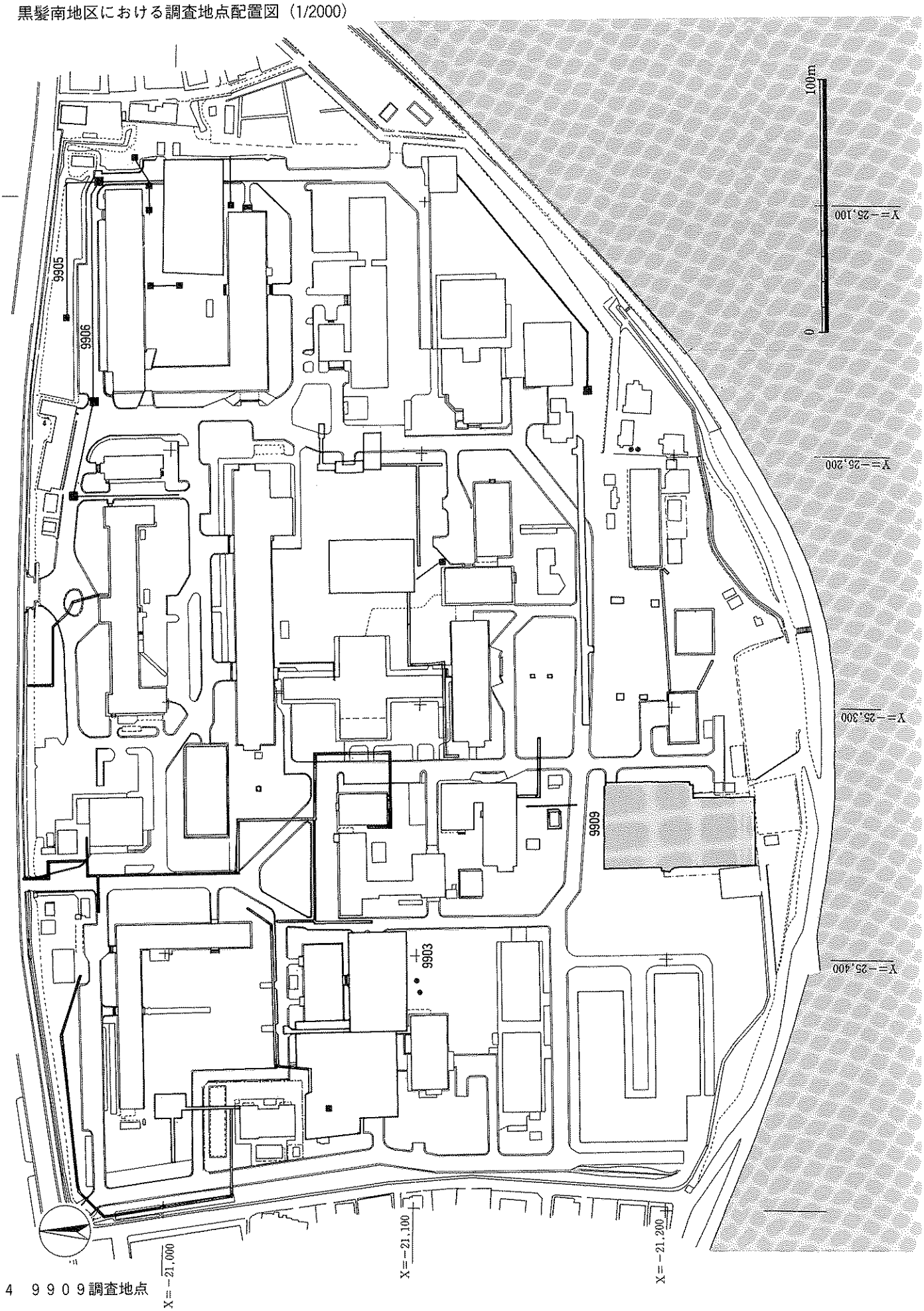
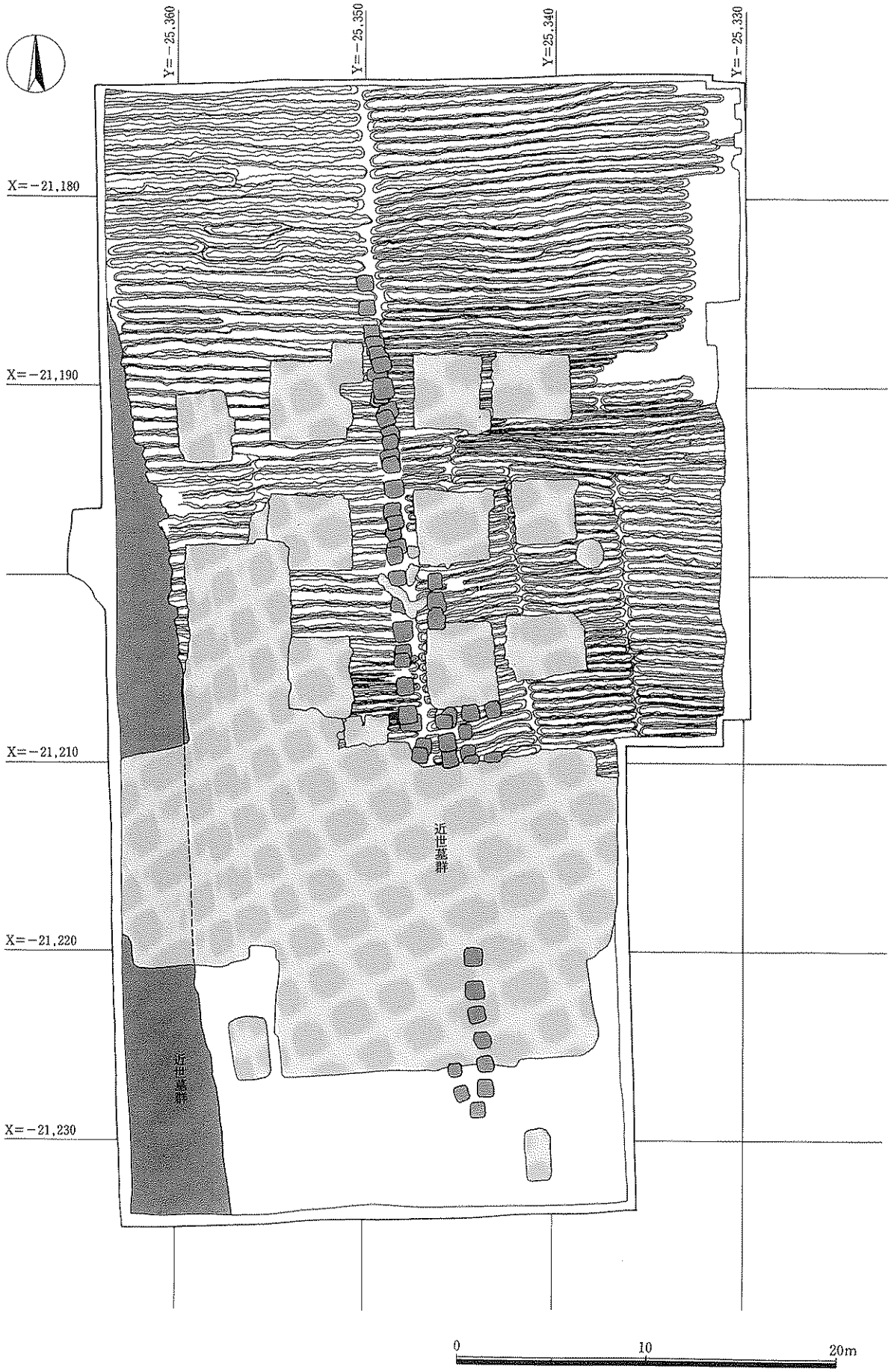


図21　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）



Ⅱ－4　９９０９調査地点

図 22　9909 地点遺構配置実測図（1/300）



Ⅱ－4　９９０９調査地点

3. 調査成果

a　基本層序

調査地は駐車場として利用されていた．このため調査区は旧建物の基礎部分を除き，きわめて遺構の残り具合が良好であった．土層は大きく15枚に分けられる．河川に近い位置にあるため，土層の堆積が著しく，最初の遺構検出面Ⅶ層上面までの深さがおよそ2mに達する．

Ⅰ層（厚さ1m）…現代埋土およびバラス
Ⅱ層（厚さ60cm）…昭和28年白川洪水の際の砂層
Ⅲ層（厚さ40cm）…暗茶褐色土層（近代埋土層）
Ⅳ層（厚さ20cm）…灰暗褐色土層（近代耕作土層1）
Ⅴ層（厚さ20cm）…暗茶褐色土層（近世後期耕作土層）
Ⅵ層（厚さ10cm）…淡緑灰色砂層（近世中期洪水砂層）
Ⅶ層（厚さ40cm）…茶褐色土層（近世中期耕作土層）

b　検出遺構と遺物

Ⅰ区とした南側はその半分が旧建物によって攪乱されており，またこの地区はⅥ層の被覆がなかったため，畑の畝を明確に捉えることができなかった．よって北側のⅡ区（1,200㎡）においてのみ良好な畑の畝遺構を検出できた．

Ⅶ層面が近世の畑の面であり，畝200条余りを検出した．このⅦ層面は洪水によるものと思われる砂層（Ⅵ層）に覆われており，遺構の検出は比較的容易であった．畝はおよそ30～50cm幅で，長い部分で19mほど，短いもので5mほどである．畝の高さは深いもので30cmほどであり，山部分の幅が狭いのが特徴である．単位としては南東部に5mの短いタイプが30条ほど3列に並び，その他の地区が長いタイプで構成されている．

Ⅵ層およびⅦ層から近世陶磁器片，釘，煙管，銅銭などがコンテナ4箱ほど出土している．近世陶磁器は大橋編年のⅣ期（1690～1740年代）を中心とするもので，煙管が泉編年ⅣもしくはⅤタイプ（18世紀代），銅銭は新寛永および寛永通寶鉄銭であり，これが示す年代は1739年以降であることから，18世紀後半の洪水によって埋没した畑と思われる．この時期の肥後藩内で発生した洪水の履歴を参考資料（表3）として付けているが，遺物の年代観からみておそらく寛政～文化・文政年間のものが該当する可能性が高い．（文化年間には，当地は畑として利用されている（図24）．

これに続くものとして，近世墓53基余がある．調査区の西よりほぼ中央に直線状をなすように配置している．以前の時期の遺構であるⅦ層の畑の畝境に沿って配置していること，埋土の質からⅤ層からの掘り込みと考えられ，水没後さほど時期を経ずに形成されたものと考えられる．

最後に調査区の西側に畑とは少し方位を違えて，近代墓が形成されている．掘り込み面はⅣ層面であり，最も古い（確認できる限りの範囲で．）もので嘉永6年の年号をもつ．ただし，この墓地は調査を行っていない．この西側の墓地は調査区の南西にある旧熊本刑務所の墓地の前身であろう．

4. 成果と問題点

今回は調査途中であり，Ⅶ層面以下の状況についてはいまのところ不明である．ただし，Ⅶ層で検出した近世中期の畑遺構は，考古学的にあまり状況が把握されていない近世の畑の状況を知る上で，さらに当時の災害史を考える上で貴重な資料を提供するものといえよう．

耕作作物に関しては，現在耕作土の土壌サンプルを水洗選別しているが，オオムギ・マメ類が少量検出されている．土壌の水洗は一部が手についた段階であり，その全体的な成果については別の機会に報告することとする．

図23　調査区北壁土層断面実測図（1/100）

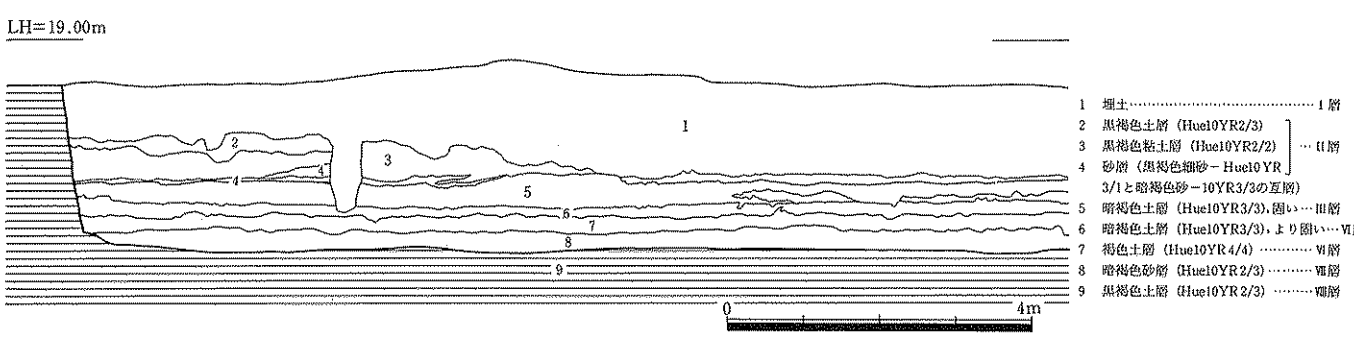


写真 45　Ⅰ区全景（東より）

写真 46　Ⅱ区全景（南より）

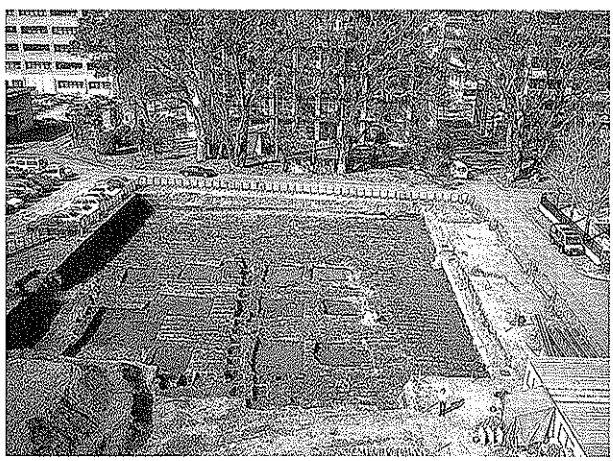


写真 47　Ⅱ区北壁土層断面（南より）

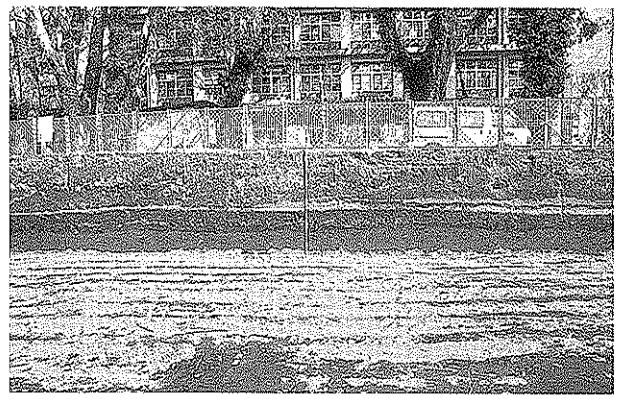


写真 48　鉄銭・銅銭出土状況（東より）

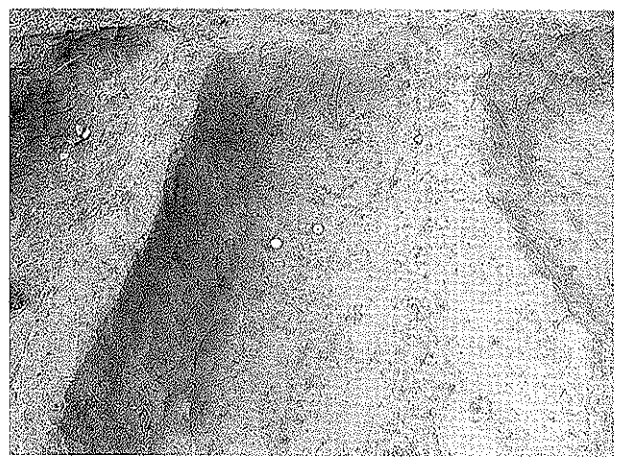


写真 49　調査区全景（北東より）

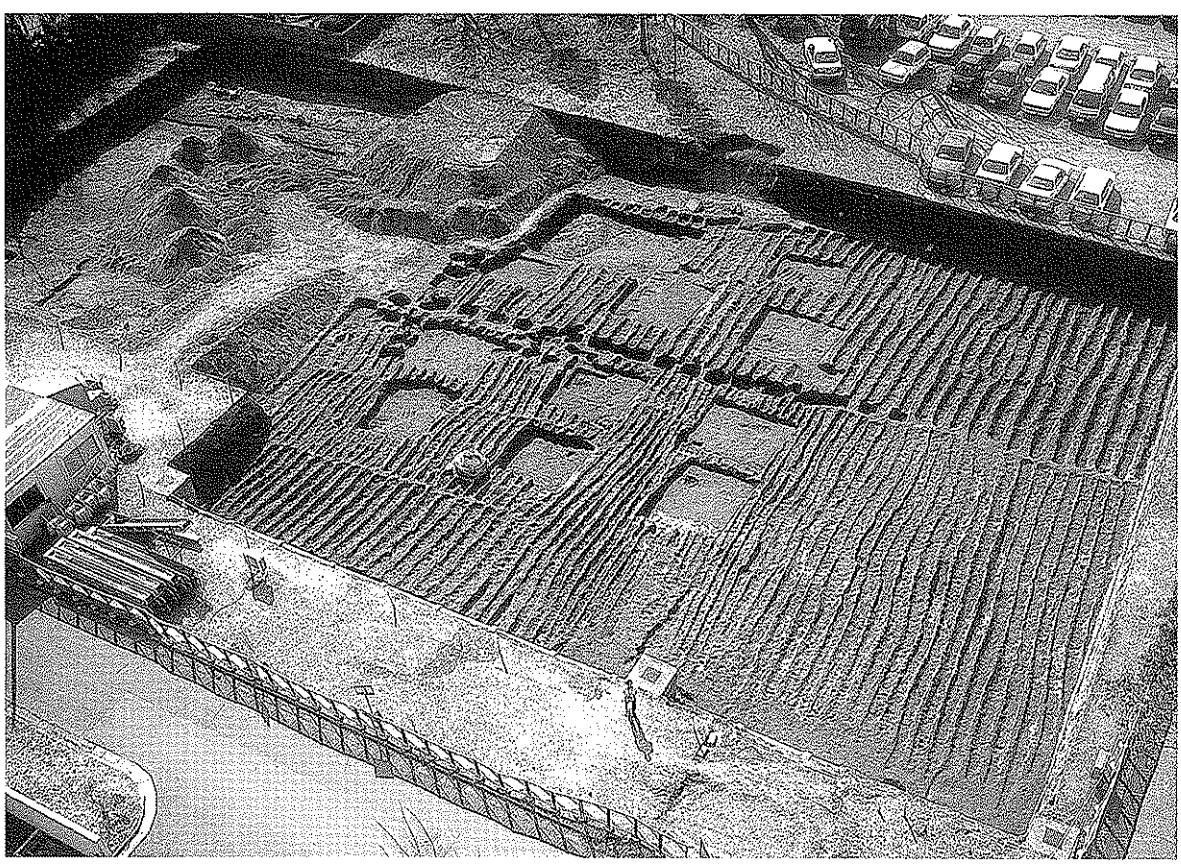
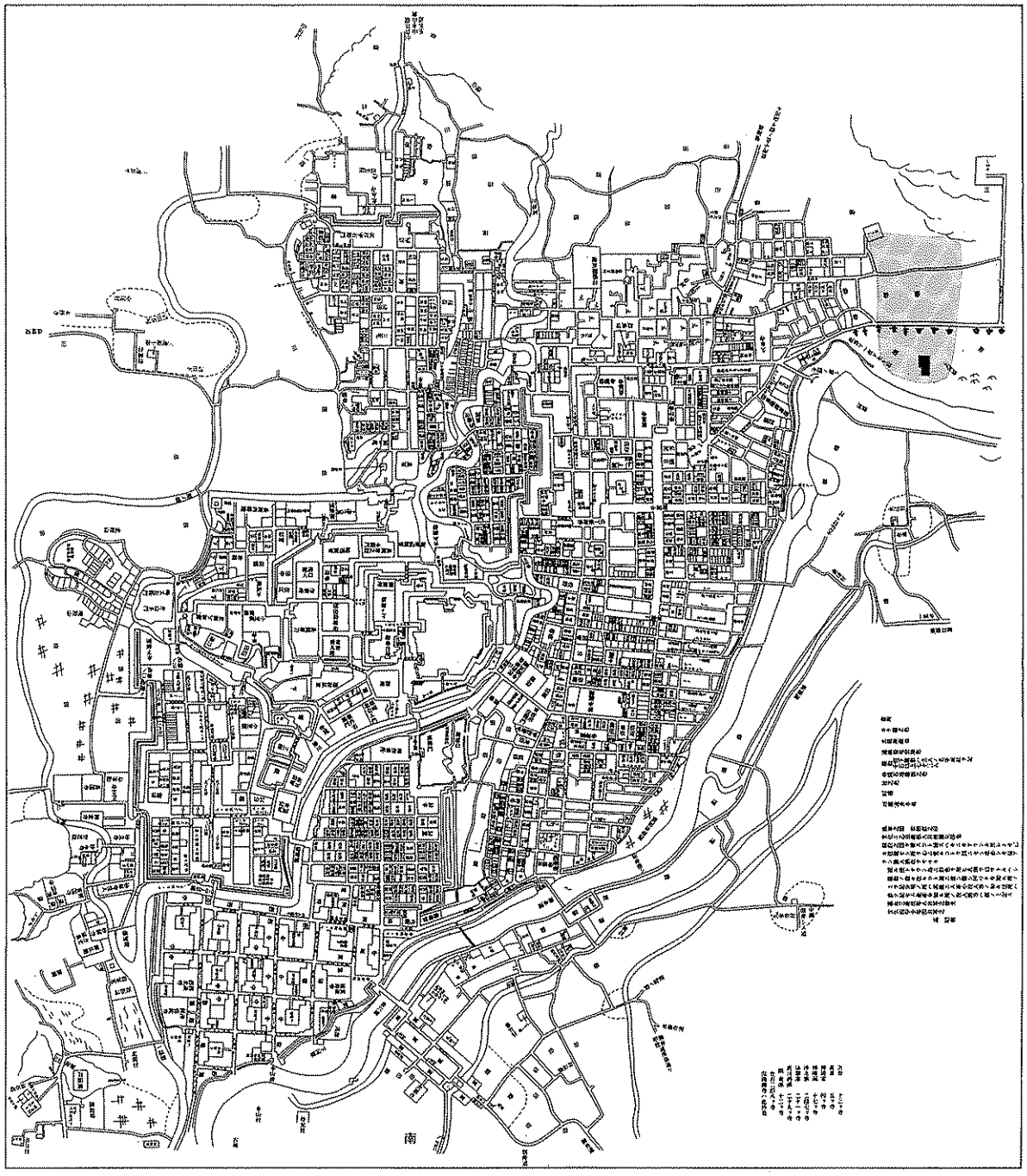


表3　肥後における江戸中期～後期（元禄～嘉永年間）の水害記事
（『熊本藩年表稿』細川藩政史研究会編 1974 より抜粋）

年号	西暦	月日	記録の内容	地域
元禄 4	1691	6.12	小川町のみ洪水，米穀多く流出（気）	小川町
元禄 9	1696	6.18	洪水，人々流出（気）	
元禄 12	1699	6.9	洪水（「玄察」に此年当国北目大洪水，大津町かしらの土手山水にて切れ町々損ずる．南目は小洪水．右の熊本古町にて 3 尺水揚がるとあり．本文に該当するか）	北目 古町
元禄 13	1700	5.15	甲佐川 30 年来の洪水（玄察）．	甲佐川
元禄 15	1702	6.10	小川町洪水（気）．	小川町
		是年	国中水損洪水大変あり（「福岡県災異誌」に 5 月，6 月及び 8 月同方面大風雨洪水の記事あり，本藩の分もその何れかに関係あるか）（肥・本）．	肥後
宝永 3	1706	6 月	肥後洪水（肥）．	肥後
正徳 2	1712	6 月	所々に洪水，長六橋落つ（覚）．	白川
正徳 5	1715	2.2	風雨強く塘破る（気）．	不明
享保 4	1719	5.22	肥後洪水田畑 13 万石余損毛（肥）．	肥後
享保 14	1729	8.19	矢部大洪水菅村白谷社後の山崩れ神殿拝殿流失（郷歴）．	矢部
享保 17	1732	5.7	是日より洪水，13 日迄減水せず，そのため田畑腐れ害虫発生被害甚大（実紀・肥）．	不明
享保 19	1734	5.10	是日より 15 日迄肥後強雨洪水（家譜続）．	肥後
元文 1	1736	5.29	是夜より翌晦日にかけ強雨洪水，水損田畑 5062 町 2 反余（高 56918 石余）塩浜 46 町 4 反余，川塘 6370 間余，磧所 9960 間余，潰家 43 軒，死者 22 人（肥）．	不明
		是月	白川洪水にて長六橋下で馬船流れるのを繋留した者共へ心付を与う（年覚）．	白川
元文 2	1737	7 月	諸国大洪水，本藩にて田畑 6 万 7000 石余損毛（肥）．	肥後
		10 月	鶴崎洪水にて損高荒積の書付岡田庄大夫へ達（年覚）．	鶴崎
天文 4	1739	6.17	21 日まで川尻方面大洪水，男女大小 79 人 4 日間西蓮寺にて養う（川尻史 291）．	川尻
天文 5	1740	3 月	甲佐手永洪水に付，請藪荒畝分去 1 ヶ年代米上納御免のこと（覚）．	甲佐
延享 3	1746	6.14	洪水（年）．	不明
宝暦 5	1755	6.1	此日より 9 日迄強雨洪水，山崩，破損，流家死人多し，稲津弥右衛門活躍す（家譜続）．	不明
		8.5	去 6 日の強雨洪水の損毛 23 万 560 石と幕府に届く（家譜続・新続跡覧）．	不明
宝暦 6	1756	4.17	翌 18 日迄強雨出水（肥）．	不明
宝暦 9	1759	3.25	大雨出水（肥）．	不明
		7.22	是日より 24 日迄強雨、諸川出水（肥）．	不明
宝暦 13	1763	5.28	強雨にて諸川出水（肥）．	不明
明和 3	1766	5.25	強雨洪水，球磨川 1 丈 9 尺，水俣川 1 丈 3 尺出水，田畑浸水 469 丁 6 反余，萩原塘破損 1255 間，修覆人夫数 19,507 人（肥）．	南部
安永 1	1772	8 月	雨降り続き田畑冠水す，為に玉名郡 6 手永急に飢え，救助として櫨方より銭 60 貫目，云々（肥）．	玉名郡
安永 7	1778	7.10	肥後大風雨，洪水（本）．	肥後
天明 6	1786	6 月	6 月下旬より 7 月にかけ藩内（内田・中富・坂下・矢部手永）洪水（覚）．	矢部他
		6.29	強雨増水，白川 1 丈 7 尺，長六橋流失（肥・町日目）．	白川
		7.28	夜大洪水（気・川尻史 291）．	川尻？
天明 7	1787	4.12	諸郡水害（寺例続）．	肥後
		8 月	大風洪水（気・川尻史 291）．	川尻？
寛政 1	1789	6 月	熊本地方渇水(本)．然るに 6 月 14 日より玉名方面強雨，洪水，高瀬御蔵浸水，米 1,767 俵潤米となる（肥・覚）．	玉名・高瀬
寛政 2	1790	6 月	五町手永，沼山津手永洪水（覚）．	五町・沼山津
寛政 3	1791	5.13	6 月 12 日まで大雨降続川々洪水（損）．	不明
		6.9	是日より 12 日迄大雨，莫大の荒地出来（肥・本）．高瀬御蔵浸水（覚）．	高瀬
寛政 4	1792	6.20	高瀬方面洪水（本）．	高瀬
寛政 7	1795	6.11	大洪水，京町山崎のほか一切水浸（本）．	白川
		6.12	阿蘇山出水，熊本洪水（気・肥後の風土史・熊本県災異誌）．	熊本
寛政 8	1796	5 月	15 日頃より雨降続，度々洪水（損）．	不明
		6.11	大雨降る，熊本大洪水（郷歴）．	熊本
		6.12	洪水 1 丈 6 尺，緑川・加勢川筋 53 ヶ所塘切れ，藤富村権藤「古ボケ」を生ず，俗に「辰の年の大水」（川尻史 291）．	緑川・加勢川
		10 月	五町手永，宇留毛村懸竜田山洪水で諸木根こげになったものの処置について（年覚）．	竜田山
享和 2	1802	4.8	是日より 10 日まで強雨，諸川満水（肥）。	不明
享和 3	1803	4.22	是日より 5 月 23 日まで降雨諸川増水（肥）．	不明
文化 1	1804	4.23	所々洪水（肥）．	不明
		5.14	大雨，白川満水（肥）．	白川
文化 7	1810	3.5	大雷雨にて白川石塘切れる（度譜・肥）．	白川
		3.7	強雨，諸川満水，白川 1 丈 5 尺，球磨川 1 丈 8 尺，佐敷川 1 丈 7 尺（肥）．	肥後

		5.18	是日より20日迄強雨大水（肥）.	不明
		6月	是月初旬より強雨大水（本）.	不明
文化12	1815	7.6	是日より8日まで強雨，諸川満水，球磨川1丈1尺（肥）.	球磨川
		8.12	強雨にて球磨川1丈1尺，山鹿川1丈2尺出水（肥）.	肥後
文化13	1816	3月	月初より強雨，諸川満水，就中6月14・19両日増水甚しく，田畑7,819町余水浸荒地，塘2,234ヶ所27,058間破損，溺死男女17人，8月23日同断，溺死男女6人，ために田畑荒地5,227町余，塘破損520ヶ所（肥）.	不明
		6.13	強雨のため大津御蔵裏手岸崩あり，四五六番御蔵打崩，球磨川も大増水（肥）.	大津・球磨川
		8.23	強風雨，虫入（損）.	不明
文政3	1820	6.17	大雨諸川満水，白川1丈2尺，緑川1丈5尺，高瀬川1丈6尺，田畑8,466町9反余砂入水浸荒崩塘5,575ヶ所破損56,569間，寺1ヶ所倒潰，家7軒流失，倒家108軒，溺死男女12人，牛馬5疋，12月3日此の損害を幕府に届け出づ（肥・本）.	肥後
文政4	1821	5.19	是日より27日迄大雨，諸川満水，田畑3,151町余砂入浸水，塘1,420ヶ所破損28,881間，家13軒倒潰，溺死男女2人（肥）.	不明
文政7	1824	6.26	是日より28日まで強風雨，大木折れ，家根，垣根破損す，白川1丈2尺余出水（肥）.	白川
文政8	1825	8.13	強風雨被害，浸水田畑2,371丁，流失倒潰347軒（肥）.	不明
文政9	1826	5.21	前日より大雨，高瀬川，球磨川出水（肥）.	肥後
文政10	1827	5.19	20日迄大雨，諸川満水（肥）.	不明
		6.4	強雨，水損多し（肥）.	不明
文政11	1828	5.5	大雨洪水，球磨川増水（肥）.	球磨川
		5.20	雷雨，翌日大雨，緑川，球磨川増水（肥）.	南部
		5.29	29・30日大雨満水，白川・菊池川・緑川など（肥）.	肥後
		6.7	大雨，白川・菊池川・御船川・緑川・合志川など大洪水（本・肥）. 鞍嶽山潮，長六橋流失，田畑水損7,083丁1反余（本・肥）.	肥後
		6.17	大雨，白川・球磨川洪水（肥）.	肥後
		7.2	強風雨，白川・御船川・緑川・河江川・高瀬川などで出水（肥）.	肥後
		7.12	強風雷鳴白川増水，長六仮橋又々流失（肥）.	白川
天保1	1830	4.22	強雨，白川出水（肥）.	白川
		6.15	大雨球磨川出水2丈余（肥）. 加勢川・緑川出水（川尻史291）.	南部
		7.8	昨夜より大風雨，八代洪水，鶴崎強風（肥）.	八代
天保2	1831	5.19	上旬より梅雨，この日強雨にて八竜塘切れ，鯰・沼山津方面浸水（肥）.	鯰・沼山津
		5.26	川尻地方大洪水（天明誌484）.	川尻
		5.29	28・29両日の大雨で八竜塘更に切れ，野田村延寿寺裏新塘外4ヶ所切れ，川尻町野田杉島両村は57日，横手・銭塘・沼山津は3～13日，鯰手永は20日水浸しとなる．田畑水損12,850丁，潮塘453間，川塘48,633間，井手塘27,392間破損．諸官宅20軒，侍屋敷11軒，軽輩屋敷219軒，町屋904軒，百姓家2,545軒流失破損，橋565流失，死者17人（度譜・肥）. 川尻蔵米10,800俵浸水（1本に8,250俵ともいう）（肥・川尻史316）.	南部
		6.1	球磨川出水（肥）. 暁方延寿寺洪水のため倒壊流失す（気・川尻史315）.	球磨川
天保3	1832	6.10	洪水，加勢川塘破損，田畑水損7,463丁4反余，倒潰水損家数1,272軒，塩浜38丁5反余水洗剥，溺死3人（肥）.	加勢川
		6月	川尻地方大洪水，加勢川掘切旧にかえる（本）.	川尻・加勢川
天保4	1833	7.20	この頃菊池・合志地方強雨，諸川満水（肥）.	北部
		8.22	この夜より翌日迄強雨，鯰手永312丁1反余水浸その他被害（肥）.	鯰
天保5	1834	5.8	9日迄大雨洪水，白川・球磨川出水（肥）.	肥後
天保6	1835	4.21	24日迄諸川満水（肥）.	不明
		5月	下旬諸川出水，水浸田畑12,854丁2反余，死者17人（肥）.	不明
		6.10	洪水，水浸田畑7,463丁4反余，溺死圧死3人（肥）.	不明
		8.22	此夜より翌日にかけ強雨，鯰手永低地の村，田畑312町1反水浸，其の他被害あり（気・熊本県災異誌）.	鯰
天保7	1836	12月	諸国洪水，諸物価騰貴，至貧の者を救恤す（本・肥）.	不明
天保8	1837	1.23	大雨洪水にて麦作数数百丁水浸し（肥）.	不明
		3.14	大雨出水（肥）.	不明
		3.24	大雨出水（肥）.	不明
天保9	1838	4月	下旬より5月下旬にかけ時々強風雨出水あり（本・肥）.	不明
天保10	1839	5.28	洪水（肥）.	不明
天保11	1840	5.17	大雨洪水（肥）.	不明
		6月	数回大雨，出水（肥）.	不明
天保12	1841	4.24	強雨，諸川満水（肥）.	不明
弘化3	1846	閏5.9	強雨，諸川満水，白川1丈2尺（肥）.	白川
		8.4	大津地方強雷雨，田畑並びに町内水溢れ，往還筋増水4尺余（肥）.	大津
嘉永2	1849	5.13	川尻方面大風洪水1丈3尺，19日洪水1丈1尺正中島町56軒のうち40軒庭入床あげ（川尻史293）.	川尻
嘉永3	1850	8.7	肥後強風雨，田畑618丁5反7畝水浸，川塘1,747間根切破損，百姓家9,779軒倒破（本・肥）.	肥後

嘉永 4	1851	2.21	強風にて鯰手永田畑浸水，同 29 日強雨，内田・中富・南関・坂下，翌晦日鯰・大津・中村・山鹿諸手永諸川満水，田畑浸水す（肥）.	肥後
		4.22	強雨，鯰手永田畑浸水（肥）.	鯰
		5 月	洪水 6 尺（気・川尻史 293）.	不明
嘉永 5	1852	8.22	肥後大風雨，田畑浸水（肥）.	肥後

図 24 『熊本之図』文化二年（1805）にみる調査地点の位置（アミは熊本大学，黒ベタが調査地点）

（『新熊本市史別巻第一巻絵図・地図』上　中世・近世の解説図 P28 を改変）